

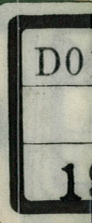


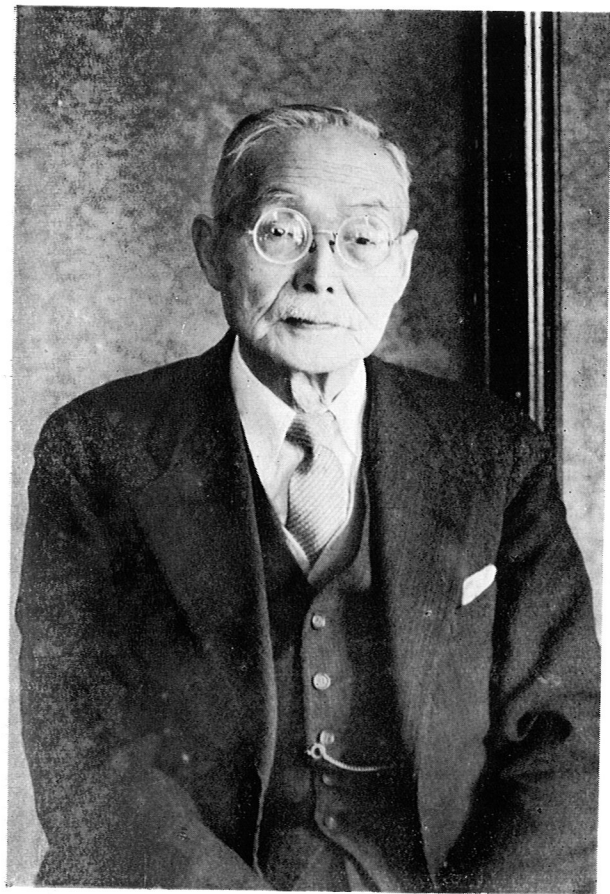
真田秀吉君追悼号



昭和三十五年九月
旧 交

会





真 田 秀 吉 先 生

(昭 和 3 4 年 5 月 撮 影)

真田秀吉君追悼号 目次

- 一、真田秀吉年表……………1
- 一、真田先生追悼号の刊行にあたって……………5
- 一、真田博士の憶い出……………1
- 一、真田博士追憶……………1
- 一、真田先生の思出……………2
- 一、故真田秀吉博士の思ひ出……………2
- 一、真田さんの思ひ出……………5
- 一、真田さんと私……………6
- 一、真田先生を憶ふ……………12
- 一、真田秀吉先生の思ひ出……………14
- 一、真田先生と傾斜した軌……………15
- 一、やさしい真田さん……………18
- 一、先生の肖像面を画く……………19
- 一、真田さん宛ての手紙……………22



登 録	昭和40年5月11日
番 号	第 1953 号
社団法人	土 木 学 会
附 属	土 木 図 書 館

神戸市長	原口忠次郎	22
	金子源一郎	19
	田淵寿郎	18
	片山信雄	15
	坂田昌亮	14
	田村勝好	12
元内務事務官	橋本甚四郎	6
	蒲 孚	5
	牧野雅楽之丞	2
	村山喜一郎	2
	青 山 士	1
	徳田 文作	1
	牧野雅楽之丞	5
		1

一、真田大先輩の思出……………	高橋嘉一郎……………	23
一、真田さんを偲ぶ……………	西尾辰吉……………	24
一、真田先生と利根川改修工事……………	富永正義……………	25
一、日進月歩……………	柴田辰之進……………	28
一、哭真田三山博士……………	鈴木健二……………	29
一、真田先生を憶う……………	遠藤貞一……………	29
一、真田先生に叱られる……………	嶋野貞三……………	30
一、真田先生を悼みて……………	河野正吉……………	31
一、真田会長の思い出……………	井関正雄……………	32
一、真田先生を偲ぶ……………	安藤秀夫……………	33
一、勝利の人、真田博士に捧げる言葉……………	松尾春雄……………	34
一、真田先生を憶ふ……………	井上清太郎……………	34
一、故人愛惜……………	本莊秀一……………	35
一、真田先輩を悼む……………	長久保俊夫……………	36
一、真田さんの思い出……………	伊藤信……………	37
一、真田さんを偲ぶ……………	立神弘洋……………	38

一、真田秀吉博士を偲ぶ……………	米田正文……………39
一、真田先生の憶い出……………	宮田隆一郎……………40
一、真田博士をお慕いして……………	山本三郎……………41
一、真田秀吉先生を偲ぶ……………	三原市長 平井昌藏……………42
一、真田秀吉先生を偲びて……………	西日本復興建設株式会社社長 松村恭二……………43
一、真田先生を追憶して……………	復興建設技術協会中国四国支部長 小藤原覚一……………47
一、真田さんのことども……………	三原市小林医院々々長 藤原覚一……………47
一、懇切な心づかい……………	三原市三原図書館長 原田基……………48
一、真田三山翁を憶ふ……………	三原談風会 未酔 原田基……………48
一、老博士の漢詩に就いて……………	日本南画鑑賞会主幹 西村南岳……………49
一、真田博士の文献えの功績を讃える……………	西村南岳……………56
一、編輯後記……………	青木楠男……………68

真田秀吉年表

年 月 日	数 年 才	
明治 六、五、五		広島県御調郡三原(現在の三原)市に生る。父嘉兵衛(天保四、九、一生)母みとの二男兄弟八人(男四、女四)。
一三、九	八	三原東小学校入学。
一九、九	一四	三原小学校中退、京都顕道学校に入り寄宿舎生活(仏教主義の学校)。
二一、九	一六	京都同志社普通科一年に入学、下宿生活。
二二、九	一七	京都第三高等中学校(現在の京都大学)予科補充に入学予科三年、本科二年なり。
二七、九	二二	東京第一高等中学校に転学、寄宿舎生活。
二八、九	二三	東京帝国大学工科土木科に入る
三一、七	二六	大学卒業工学士となる。
" 八	"	内務省第五区(大阪)土木監督署技手拝命。
三二、二	二七	淀川改修第一工区大道工場主任。
三三、四	二八	土木監督署技師、西島工場主任
三五、一	三〇	伝法町に借家す。 京都帝国大学教授吉田彦六郎長

三六、一、二九	三三	女ツル(十八才)を娶る(土木署長沖野氏夫妻の媒酌)
三八、一	三三	長女幸生る。
" 四、一	三三	上福島に土地を借り新築して移り別に借家を作る。
" 一〇、二二	三三	官制改正、内務省大阪土木出張所となり内務技師、淀川第二工区主任となり家を京都府山崎に移す。
二〇、二二	三三	母みと死亡(六四才)
一二、三	三三	次女和子生る。
三九、八、二九	三四	父嘉兵衛死亡(七四才)。
四〇、五	三五	兼任淀川下流淀川工場主任。
四一、九、一二	三六	長男弘生る。
四三、三、一九	三八	三女フジ子生る。
四四、四、一	三九	淀川工区主任、兼第二工区主任。
四五、四、一	四〇	家を大阪市川崎町に移す。
大正 二、一〇、	四一	東京土木出張所へ転勤、家を東京市麹町区三番町へ移す。
三、	四二	利根川第三期改修田中工区主任 单身田中村に下宿、家を大森於伊勢原(現在の山王二丁目)に借家す。
		土地三三〇坪求め、六九坪の家を新築し移る。
		兄の戸籍より分家する。

五					欧米各国へ出張、八月一日第一次世界大戦起り独に宣戦、米一ヶ月、英四ヶ月、仏伊一ヶ月滞在独には入らず大正四年二月十一日帰朝。
大正	六、	一二、一	四四	利根川栗橋工区主任兼田中工区主任。	
	七、	五	四六	利根川第三期改修主任兼栗橋、明戸機械工場主任。	
	九、	四	四八	工学博士となる(土工論及河川改修要論)	
	一〇、	一二、一六	四九	妻ツル死亡(三七才)数年間茅ヶ崎にて療養す。鶴見総持寺に墓地を求め葬る。	
	一〇、	七		勅任官待遇。	
	一〇、	一〇		東京土木出張所工務部長兼庶務部長。	
	一二、	三、一二	五一	次女和子死亡(一九才)腹膜炎。総持寺に葬る。	
	一二、	九、一		関東大震災、焼失家屋四〇万戸。	
	一三、	三、二五	五二	大阪土木出張所長、高等官二等。	
	〃	一一、三〇		辻ぢやうを娶る(四五才)	
	一四、	一、二〇	五三	長女幸、楠瀬常猪(商工省勤務)に嫁す。	
				この秋、大阪市住吉区文の里に新築して移る。	

昭和	一五、	三、三一	五四	楠瀬幸、長女澄子を生む。
	三、	九、三	五六	東京土木出張所長に転任、小石川区原町三一に借家し、大森の家は貸与中。
	四、	三、三	五七	先妻ツルの父吉田彦六郎死亡(七〇才)
	〃	七、一一	五九	楠瀬幸次女雅子を生む。
	六、	一、一二		三女フジ子大内義郎(米國理学士、上海自然科学研究所員)に嫁す。
	六、	四、二〇		高等官一等
	六、	八、一二		妻ぢやうの母辻操子死亡(八三才)
	七、	二、二八	六〇	大内フジ子長女栄子を生む。
	八、	三、	六一	長男弘九大卒業、商工省に入り大阪鉱山監督局勤務。
				土木学会会長就任。
	八、	九、一八		勲二等瑞宝章。
	八、	一一、二		大内フジ子次女順子を生む。
	九、	五、五	六二	内務省退官。在官三十六年。
	九、	五、一一	六二	正三位
	九、	五、二九	六三	楠瀬幸長男彰彦を生む。
	一〇、	八、一七	六四	大森旧邸内に新築(八五坪)し移り、旧家屋は借す。
	一〇、	一〇、三〇		長男弘(三一才)、田辺梅香(九大教授田辺唯司の長女二二才)
	一三、	二、一四	六六	

真田秀吉年表補遺

内務省在官中は治水事業、就中淀川、利根川治水に従事し、土工、護岸、水制、砂防、堰堤に興味を持し、晩年は道路、港湾、尤も工事の機械化に努力する。

在官中は管内各府県の森林委員、都市計画委員、大阪、和歌山港湾調査委員、京都水道調査計画委員等を歴任す。退官後は川崎鉄網工場顧問（昭和九年—一五年）

長野県土木嘱託（昭和九年—一六年）

東京市水道拡張調査委員（昭和十三年—一七年）

朝鮮洛東江破堤善後策嘱託（昭和九年）

土木学会日本土木史、外人功績調査編輯副委員長、内務省治水調査会委員。

利根川治水協会副委員長。

終戦後は復興建設技術協会中国支部長。

中国、四国建設機械運営協会長。

広島県綜合開発調査委員。

三原市顧問として郷土三原市の文化保存、興隆に寄与した。又三原市保勝会代表として

(イ) 正法寺の写経六〇〇巻

を重要文化財に

(ロ) 宗光寺山門

(ハ) 三原城を史蹟に

(ニ) 三原城趾を山脇家より三原市へ買収

一四、二、一二	六七	長男弘の長女房枝生れる。
一七、一〇	七〇	弘の家を大井原町に買ふ。
一七、三、三〇		長男弘の次女友子生れる。
二〇、四、二五	七三	東京大空襲のため妻の郷里岡山県金光町辻方へ妻と二人疎開、大森家は借す。
二二、五、一九	七四	原籍地 三原市東町へ疎開。
二二、四、一五	七五	大森の旧き家は財産税支弁の爲売却。
二七、三、	八〇	弘退官（在官一九年）
二七、一、二〇	八三	疎開地三原より大森宅に帰る（疎開期間合計一〇年八ヶ月）
三二、五、二六	八五	妻ぢやう死亡（七八才）大骨折心臓衰弱のため。鶴見総持寺に葬る。
三五、一、一六	八八	近親一同を招き米寿の祝宴を催す。
一、二〇		午前零時二〇分心臓麻痺にて死去。
四、二		内閣総理大臣より銀杯下賜さる。
		鶴見総持寺に葬る。

- (ホ) 頼山陽祖先の地頼兼に建碑
 (ヘ) 西野梅林、山陽四ツ堂の修理
 その他各種の従来世人の顧みざりし史跡名所の顕彰に努め文化に寄与した。
 (ト) 紳士間に毎月書画喫茶を樂しむ談風会を創つた。

著 書・論 文

- 河川改修工事实施に就て (大正七年 土木学会)
 河川改修工事と雜費との關係 (大正十一年 ")
 砂防工事工法沿革 (大正十四年大阪土木出張所)
 河川水流の制御に就て (昭和五年)
 日本水制工論 (昭和七年)
 砂防堰堤雜感 (" 七年 東京土木出張所)
 河川砂防工隨感 (" 九年 ")
 一里塚の話 (" " ")
 碓水峠修路の今昔 (" " ")
 日本土木史 (" 十一年 土木学会)
 東邦土木と外人 (" 十七年 ")
 日本土木行政と機械化施工 (" 二六年中国四国建設局)
 (" 三三年関東建設局)
 明治前日本土木史 (昭和三年 日本学士院)
 内務省 直轄土木工事略史

沖野 忠雄 博士 伝 (昭和三十三年 秋)
 外に大正四年日本工学会誌に一文を寄贈し銀賞牌を受く。

趣 味 等

觀世流謡曲を好む。酒煙草は少々、将棋、碁等はやらず、退官後書画、漢詩を樂しむ。
 身体は寧ろ蒲柳と云ふ程度なるも用心深く一病なく、よく健康にて長寿を保ち得たり。眼は大学頃より近眼鏡を用ひ、齒は早くより総入れ歯。少量の食物をよく咀嚼する癖あり、之は養生法に合致し期せずして長寿を保ち得たる所似かと思ふ。

序

真田博士は明治三十一年二十六才で帝大土木工学科を卒業し直に内務省に入り、昭和九年六十二才で退官に至るまで在官三十有六年、内淀川に十三年、利根川に十三年、大阪及東京土木出張所長計十年、退官後昭和三十五年一月逝去さるまで二十六年中十年八ヶ月は地方に疎開されて居った。

幼少の頃には京都の坊さんの学校にも居られた様だが、淀川河川工学の淵奥を極め、利根川時代には淀川で修得された豊富な経験に博士独特の創意を加え、技術方面に一新紀元を開いたのみならず、運営管理の方面に於ても我国直轄工事の基準を確立し、其後永年に亘り然も最少の工費で帝都をして水魔の害を免れしめたことは、博士の偉大な功績であった。

退官後は治水協会、土木学会、河川、港湾、道路協会等の顧問委員として公共事業に貢献され、傍八十八才の高齢に至るまで土木諸般の実史を自ら調査蒐集され、後世に貴重な資料を残したのであるが、氏の偉大なる努力に満腔の敬意を表するものである。

大戦中より十年余、地方疎開中は郷里三原市の文化の保存興隆に努められたが、此頃より漢詞を作ることを始め、人生の所感を詩に訴え同志を呼合し大に勉強された。同郷の偉人頼山陽の大の「フアン」で七十を超してからの手習だが、其進歩著しく其道の人々を吃驚りさして居る。其詩集を出版中に亡られたのは誠に残念である。

博士は旧交会では、会の名もない時代からの会員で然も非常に熱心に会の発展に尽力され、初代の会長で最も縁故の深い育ての親でもあった。大会は勿論毎月の例会にも八十八才の老齢までかかさず出席され団欒のうちに熱心に後進のため貴重な経験談を話され時のたつのを知らなかったが会員も又喜んで傾聴し、氏は敬慕の中心であった。

同じ目的や趣味のもとに苦楽を共にしたもの程、思い出の深いものがなく、又その思い出はいつまでも、いつまでも生きている。博士と同じ事業に苦楽を共にした吾々旧交会員並びに博士と趣味を同うした人々の此の追憶集は博士を慕い博士を思うものの微衷である。

昭和三十五年 七月

牧野雅楽之丞

真田博士の憶い出

徳田文作

真田秀吉博士の御卒去は、実に邦家のため痛惜の至りにたえませんが、左記短文は同氏拙者への最後の御通信であります。

「拝啓益々御清適賀上ます。このたび旧交会催の故沖野博士業績をあつめるにつき御依頼申しあげたところ、早速御送り下され有難く存じあげます。時間が充分ありますから、登載することにいたします。今回地建にて貴玉受領した次第に御座候

貴兄が登米工場より久原行のとき名井氏の狂歌止められて（登米）先きの望は内勝省（無い）、徳だ徳だ（徳田）と飛んで行く腹（行く久原）は誠に当意即妙の句と思えますから「小生記す」として加えたく存じますから御諒承願います。

沖野さん関係者追々減少して淋しき折柄、貴兄の思い出話は誠に珍中の珍と存じます。小生は八十五歳を迎え先づ先づ無事、折角御大切に、先づは御礼申しあげます。真田秀吉昭和三十二年四月二十六日」

真田博士追憶

青山士

我等の大先輩真田博士天寿を全うし八十八歳の高齢に於いて去る昭和三十五年一月二十日忽焉として逝かる之れ天なる哉命なる哉。

博士は其長き御生涯を一貫して土木工学及び技術の進歩達に其蘊蓄を傾けらるゝと同時に後進をねんごろに御指導せられつゝ淀川利根川の改修工事に又碓氷の道路工事等其他幾多の土木事業の遂行に寄与せられたる功績顕著なる茲に謂うを待たざるものがあります。

工人は死せず。工人は死せず。

只々消へて行く。只々消へて行くとは云はじ。

人類の為に。多くの善き文化的。

記念物を残して。逝く。

猶又我が旧交会の会長として其会の発展に尽され其大を成さしめしは我等会員として深く感謝に堪えざるものがあります。

今や天の高きに於てか又は清き河の彼岸に於ての外博士の嚆矢に接することは出来ません。特に老生は大正の初めより長き御交誼を辱う尚直きに其後に続くの運命にあるに於て追

憶の念一層切なるものがあります。

見送りのうしろや寂し秋の風（ばせを）

昭和三十五年三月三十一日

真田先生の思出

村 山 喜 一 郎

真田先生には矍鑠として、壯者を凌ぐ御健勝であられたのに、忽焉として御逝去なされたことは、洵に痛惜の極みである。

先生が内務省大阪土木出張所長御在任当時私は大阪府土木課長であつた關係上、度々御伺ひもしたが、いつも御懇切に面接され、何か御尋ねすると、なんとなく懐こい表情で、諄々と御指導下さる、その温容眼のあたり浮ぶ心地して、先生の御高德を、今尚偲ぶ次第である。

又御家庭思ひで、奥様と御一緒に散歩なさるを時々御見受した、いつかも大阪名物かき船に奥様御同列で見えたこともあり、琴瑟相和し。なごやかな御家庭であると拝察する。

一昨年七月東京の旧交会例会に出席した際、久々温顔に接し、よく来たなと云はれ、色々四方山話をして嬉しく過したことも、今は思出の一つとなる。

嗚呼、思えばそれが最後であつたか、謹んで先生の御冥福

を祈る。

故真田秀吉博士の思ひ出

牧 野 雅 樂 之 丞

真田先生は明治三十一年に東大を卒業され、私は四十二年出であるから十一年の後輩であり、年齢も丁度十一年違ひです。私は大学を出て二年半程東京市の水道拡張調査（今の村山貯水池の選定や之を源としての浄水給水）に従事し四十四年の暮に内務省に採用して貰つてのですが、真田さんは丁度此年に淀川から東京土木出張所に來られて居られ御目にかかったのが初めてでした。

明治四十二年に関東に大洪水があり、帝都の大部分が水底に没し、其災害甚大でした。其結果荒川、利根川、江戸川等の諸川が大々的に改修さるることになり、全国の河川技術者を東京に集め、此工事をやることになったのですが、其御蔭で私も内務省に採用され真田さんも東京に転勤になったのです。当時技術者の数も、今日から見ると、非常に少なかったが、真田さんは学校を出られてから、十数年を淀川で鍛へられ、尊き多くの経験を積むで來られたと云ふこともあり、其存在は群を抜いていた。当時真田さんは利根川第三期工区主任で中川さんは二期の工区主任でした。中川さんは真田さ

んより学校は二年先輩で利根川育ちで真田さんは淀川育ちで、其工法、施工、記帳、整理の方法等各々流儀を異にするものあり特徴も持って居った。之をある程度整理統一することが必要であつたが、少からぬ努力と、時日を要し、幾多の研究論議を重ね短とすて長をとり後世規準となるものを残されたが真田さんを煩すことが多かった。

当時吾々現場に居る者は、一にも二にも、明けても暮れても、坪当り単価に、専念する様、訓練されて居った様で、誰が作つたか知らないが、床を離れて床につくまで、坪当りに終始すると云ふ、俗語まで流行した程で、坪当り単価の現場で一目して判る様な、記帳様式を採用し、各丁場毎に、競争心を唆れ、工費の低下に努めたのも、此論議の時であつた。

此頃より、真田さんは、工事の機械化に着目され、機関車、土建車、掘鑿機、浚渫船等使用改良に努力し、後に「日本土木行政と機械化施工」を著し、大戦後世局に、喧しくなつた機械化論なども、真田さんの夙に提唱さるるところでした。

以上の様なことは真田さんの様な頭脳明晰、不屈不撓然も創意工夫に富んだ人でなければなし得ざることであつた。

私は真田さんとは、同じ東京土木出張所に、初めて勤めて居つたのですが、真田さんは利根川三期で、私は二期でしたので、直接仕事上の交渉はなかつたのですが、昭和六年内

務省で、河川港湾以外に、初めて道路を直轄施工することとなり、此時私は土木局の道路係で、真田さんは東京土木出張所長でしたので、此時から初めて真田さんと仕事上で交渉を持つ様になつたのであります。従来内務省は主として河川工事をやつて居つたので、道路は始めてであり、其人事、交渉、設備、段取、実施、整備など種々難問題が、雑然として居つたのであります。真田さんは自ら陣頭に立たれ、盛んに現場にも出られ、歳の二十以上も違ひ、若人と共に事業の解決に努力されたのですが、其専く豊富な経験と熱意と明敏な判断とは、従業員に、大なる信頼感を与え、其成果は全国出張所の模範とするところでした。

真田さんは、公務の傍ら、数々の論文を執筆され、又豊富な経験と、偉大なる氏の創造力とは、我国建設事業の基準となる、諸法式を与え後進をして、抛り所を得さしむると共に、その指導のもとに多数の優秀技術者を出したのであるが、退官後も建設事業の発展に努め、又記録保存のため、老軀をも厭わず、官庁や関係方面に、自ら連絡し、又は態々出かけられ、逝去の直前迄、資料集輯に、奔走され、後世に貴重な資料を遺されたことは、其偉大なる体力に驚くと共に其熱意と誠実な精神力に、深く敬意を表するものであります。

真田さんは、元来寧ろ蒲柳の質であつたため非常に平素は

用心深く、そのため、病にかかったことなく、反って長寿を保つことが出来たと、御自分でも、云って居られた。眼は大學時代より近眼鏡を用い、齒は早くより総入れ歯、少量の食物をよく咀嚼する習慣あり、と申されて居ったが、長寿を得た所以とも考えられる。

趣味としては、観世流の謡曲を好み、酒、煙草は少々将棋碁、マージャン等はやらす、退官後は、書画、漢詩を樂しまれ、長寿に最も必要と云わるる精神力の糧を、ここに求められて居られた様である。書詩は特に頼山陽を好まれ、山陽会の会員で、会には大学同級生の牧博士の紹介で入った様に聞いて居たが、山陽の書は、一点一撥心得られたもので、真田さんの山陽書の鑑定は、百発百中との風評あり。山陽の詩は、川中島合戦図に題された、「鞭声肅々」の詩が、特に御氣に入りだった様である。三山と号し、山陽の大の「フエーン」で、郷里に疎開中は、山陽祖先の地に、建碑に奔走され、其子三樹三郎の詩の散逸を恐れ、其集輯に非常に骨を折られた様である。定めし、山陽流の朗吟も心得て居られたのでないかと思わるるが、長の博士の御警咳に接して居った吾々も、つい真田さんの朗吟を承ったことなく残り惜く思っている。詩を作る様になられたのは、晩年の七十歳頃からの様だが、其進歩は目覚しく、前例のないと云うことである。山陽は頭が非常によく、六歳にして詩をよくし、非常に人々を驚かし

たと云うことであるが、真田さんも、頭腦明晰、非常に創造力に富んで居られたことからすると、幼少から其道にはいられたら、山陽の様な大詩人になられたのでなからうか。生前三山詩集を広く頒布すべく、折角校正進行中に突如として亡れたことはかえすがえすも残念なことである。

真田さんは、実に温厚恬淡たる風格の人であつたが、一面所信を飽く迄追及して止まぬと云う、氣骨稜々たる所も（氏の功績もここに由来するものが有つたと思うが）あり、こんなところが、山陽父子に似通うものがある様に思う。真田さんの日常生活と山陽父子のそれとは、似通つたものがない様に思はるるが、大の「フエーン」になられたのは、ひとり同郷人だったと云うこと以外に、何ものか意氣相投するものが有つたのでなからうか。

旧交会の始まりは、よく判らないが、大正十二年頃、原田さんの退官前後に、原田さんの催しで、内務省の技術者（主として勅任官）を招けたのが、始まりで、無論當時は会名もなく、会の役員などもなく、單なる集りで、何日開くと云うこともなかったが、年と共に次第に發展し、会員の範圍も広まり、月々開く様になり、現在では回を重ねること二百六十余回に及び、幾多の規約改変を経て、数年前初代会長として、真田さんに御願したのでしたが、真田さんこそ、抑々の始まりの会に出席された、唯一人の生存者であり、生みの親

とも申すべき人で、会の改変の際には、常に御意見を承った育ての親とも、申すべき最も関係の深い人でした。齡米寿に達しられても、矍鑠として、毎月の例会に出席され、若者共と、団欒談笑の内に、諄々と教うるが如く、微に入り、細に入り、其豊富な経験と崇高な経綸とにより吾々後輩を指導されて、居られたが、吾々後進者も、「ひよっこ」が母鷄に抱かれてる様な、安心感を以て、氏の周辺に集り、滿腔の敬意を表し、傾聴したのである。旧交会としても、近く米寿の祝賀会を催すべく、話し合い中であつたが、今や其人なく徒らに當時の団欒の状況を偲び、較た寂漠の感にたえない。

本年一月九日の旧交会には、何の変わりもなく御機嫌よく出席され、長寿の秘訣はとの「ひよっこ」其の質問に対し、聊か微笑れながら、「何事も度を過ぎぬこと」などと、戲談めいたことを言われ、例の如く、団欒の内に談笑されて歸られた。十六日には、近親御一同の米寿の祝宴を催された、十九日には、何事もなく夕食を済し、就寝され、翌午前零時二十分永眠されたよし、誠に自然の大往生であるが、吾々には信じ難き、やるせない悲しみであつた。生前正三位勲二等の栄位にあられたが、逝去に当り特旨を以て、銀盃一個を賜り、慈恩院寿徳弘道居士と諡し、鶴見總持寺に葬らる。

真田先生は性来、急がず、焦燥らず、弛まらず、坦々として

居られたが、常に身体を大事にし、長寿につとめ、老いて益々向学心をやし、世のため、人のため、少しでも多く遺して行こうとされたことは次の詩（最終の作と称さる）並に昨年金子源一郎氏が真田さんの肖像画を描いて送られた時、御自分で書かれた題詩によつても窺はるるが天命致し方なく真に惜しいことであるが、その偉大なる遺業は永遠に生く、在天の靈希くは睨せられよ。

三山詩

日昇東海曙光新

迎得今年米寿春

願与梅花護清節

生々百歲保其身

真田さんの思い出

蒲

孚

筆者が、内務省東京土木出張所に、奉職したのは、大正六年五月であつた。そのころ、真田さんは、利根川改修第三期田中工区主任をしておられた。筆者は、大正十三年まで、本所勤務であつたので、主任会議の節には、必らずお目にかかる機会を得た。大正十二年の関東大震災で、道三町の出張所建物は烏有に歸し、海軍省の一部に移転したころは、工務部長を勤められ、軌条を利用して、金庫を設計するよう命ぜられて閉口した。

大正十三年大阪土木出張所長に榮進されてからは、あまりお会する機会に恵まれなかったが、昭和三年九月、中川所長が技監に転出されると共に、東京土木出張所長に榮転され、その部下として、昭和五年十二月まで約二年間、お教を受けた。その当時、筆者は酒匂川、早川、花水川の砂防工事を担任していたが、立間堰堤底抜きの直後でもあり、砂防工事の設計について、意見が対立し、非常に苦勞した。

真田さんは、大へん書画に興味を持たれ、ご出張の際などは、旅館などで、よく秘蔵の書画をご覧になり、色々批評された。その方面に全然趣味のない筆者には鬼門であった。

始めて出張所長としてご来任になり、出張のお供をしたとき、前中川所長当時の積りで、停車場で乗車券を買い、お待ちしたが、時間が迫るにかかわらず、お出でにならず、お宅に電話したら既にお出掛けになったとのことで、狼狽して、ブラットホームに駆け上ったら、車中でお姿を拝見し、恐縮したことがあった。

筆者は昭和五年二月、横浜土木出張所の狩野川改修事務所主任として、東京土木出張所を去ってから、また暫らくお目にかかる機会を失った。

最近では、旧交会や学士会の午餐会でよくお目にかかり、ご元氣のお姿を拝し、喜に堪えなかった。

真田さんは内務省関係の故事の編纂につき、非常に興味を

持たれ、砂防関係その他の故事につき、時々ご照会を頂いたが、ご満足出来るようなお答の出来なかったことを残念に思った。

生来ご丈夫の方ではなかったようであるが、よく健康に留意され、本年米寿の賀を迎えられたことは、吾々後輩の指針として心掛くべきことである。

本年一月九日の旧交会例会には、ご元氣でご出席になった。その節、真田さんはよく会に出席されるからご元氣なんだと申上げた。また二十日の学士会午餐会には、ご出席の旨に遺憾であったが、その未明にて逝去になったことは、誠に遺憾である。

真田さんと私

元内務事務官 橋 本 甚 四 郎

真田博士の追悼号を發刊するから寄稿するよう、梶谷關東地方建設局長から促されたが、私は旧交会員でなし、博士の徳望高く然も後進者に対する指導誘液が懇切であられたから、之等に関する記事が囁かし数多く、会員外の拙稿など提出を遠慮すべきだと固辞した次第であったが。私が永年内務省土木局河川課に在勤し、其の間真田さんとは工事のこと、事務のことに就いて特に密接の關係がありました、加えて技

術のことに關しては博士という學識を少しも鼻にかけられず、常に通俗的に論述せられ、或は他の事物を捉えて比喩を交え、後に本問題に觸れ技術の真理を尽々と説明を加えられ、素人の私でも納得するように致されたのは有難いことであり、晩年に詩作を趣味とせられ数多く名詩があるそうだが蓋し右に述べた真田さんの個性が遺憾なく高揚されてあると思われます。

技術者の内には、素人に技術上のことを説明しても夫れは所謂猫に念仏、言うだけ損だと云う心構えの方もあるようだが、真田さんは何人に対しても、亦事の輕重を問わず技術の真理を明確にせられることを果されたので、時折私は問題を提出して御高説を仰いだ事多かった。従つて之等を一々書くことは容易でないから、其の内の二、三を書いて御生前の恩義に感謝することとした。

私が加古川改修工事を視察に行ったとき、幸にも真田所長さんが現地に出張されておった。そして誠によい所に来てくれた、実は加古川右岸堤防の拡築で〇〇組合の灌漑用水施設の改築を必要とするが灌漑面積が僅少なので工費の負担力が乏しく、この資力に耐え然も将来の維持費が殆んど皆無で済むような施設にしたいと数個の設計により検討を重ね、漸く決定した次第であるから、これより現地に就いて設計内容を説明すると申され、御自身案内役として加古川下流部右岸の

洪水敷地の中間を（下流から上流に）歩きつつ、この足下が導水管埋設線の地点であると説明され上流部に達し河流の湾曲地点に至り、此所が取水地点となるが、曲流を利用するため取水堰堤築設の要なく取水が出来るし、取水管は洪水敷地の地下に深く埋設するので破損の慮なく、然も流路の勾配と同様にして快疏を図り、流末は拡張の堤下を横断し堤外に配水塔一ヶ所を設置して分水するものなので工費は極めて僅少で済むし後年維持修理の費用も殆んどいらぬこととなると懇ろに説明された。そして全国どの河川でも出来るに限らないが、灌漑其の他の用水を河川から取水するには河川の上流或は中流部の曲流地点を利用すれば、取水堰堤を設けずに取水が可能となり、更に河川の洪水敷に導水路の埋設が出来れば取水路の用地が省けて一挙兩得であると教示された。

附記この加古川視察の後年に新潟県下信濃川上流改修起工の数年後に、同川の右岸にある灌漑用水が河床低下のため、取水施設の低下工事の認可申請書を持参された際、組合代表者三名に対し河川工事の進捗と共に年々更に河床は低下を来すのであるが、これは河川工事施工の効果であり、其の都度毎に取水施設の床下げをするのは容易でないから、僅か上流部である長岡市内の地域で河流が岸盤に突当り、左に転流する深淵がある。あそこに取水口を移し、隧道で取水するようと勸説したが、代表者の人々は疑惑の面持ちで同意せず、

組合会の総意に諮問するというのであり、私は自説を実行せしめようと書類を進めず、一年有余の間、新潟県土木出張所長より出願通り認可せらるるようにと再々の副申なので遂に私は敗屈した。其の翌年にはこの組合の直上流部の組合から同様に取水施設低下工事の出願があったので、再び自説を附演し、熱心に勧告したのに対し組合の代表者は、隧道工事が可能であれば、御説の如く何等の施設なしに河水は意の如く流下するだろうと同意されたので、富永技師の出張調査を煩した結果が、隧道による取水が施設され、然も予想以上の引水量が流下するので前記下流部組合の用水に分譲すると云う好績を挙ぐるに至った。これは真田さんから加古川で教示されたことを引用したので、上、下の両組合三千余町歩の灌漑田が永遠に真田さんの恩恵に浴すると云う次第である。

真田さんが東京土木出張所長のとき、明日何時発で日光の稲荷川砂防工事（内務省直轄工事）を視察に行くから私に同行されたいと促されたので、これは得難き好機と直ちに応諾し、共に稲荷川の既設の砂防堰堤の説明と新に設置する場所の決定理由とその効果を説明された後で、白糸の滝に行き遙かに滝を眺めながら、真田さんの言わるるには、砂防堰堤は総てこの白糸の滝の如くにと常に自説を高揚しているが、君看給えと滝の二、三ヶ所を指して、あのように砂防の堤上から水が落下する様、堰堤からの流出面の区間を長くし、流

勢を軟弱化し以て堰堤々脚の安固を図り、且又下流河岸の損壊を防止するの要があると説明された。終って徒歩、華嚴の滝に至り、滝下の巖上に立って、真田さんは滔々と落下する瀑水と飛瀑を指し言わるるには、砂防堰堤の多くは、この滝を真似て設置せらるるようである事。徒らに両裡を突出させて流水面を短縮して激流に導くため、堤礎の洗堀を来たし、更に曲流を起し河岸の崩壊を拓くのである。この滝は滝下に深き湛水壺があるので激流を軽減しておるが、これが無くあの流勢があつた儘奔流となれば、必ずや両岸に交互に激突を来すのである。だから之に類する出来形の既設の砂防堰堤（何々は）両袖を破壊短縮して水透を広く改造した次第である。と相異なる実地に於いて懇ろな指導を受けたのであった。

附記

六甲災害後新に設置する砂防堰堤工事を視察した際、或る所で巨大な岩盤をハッパをかけて取除いておらるるから其の不可を詰問すると堰堤設計通りの水透とするには斯々迄除却する要があると云う答なので。私は岩盤は其儘とし、水透を延長するのが理想に合うのでないか、然し君は現場主任として設計届のように施工する義務があらうから、茲二、三日岩盤取除きを中止されたい。

その間に何分の指示があるように取計うからと話し、その直後に現地が再査せられ、岩盤を其の儘として両袖を設けら

れ白糸の滝が実現したので、これは真田さんの教訓が抬頭し真田さんの理想が実現したのである。

利根川の改修工事で完成し河川法第六条に依つて内務大臣が維持管理を行うこととなり、東京土木出張所の所管で栗橋に其の事務所が置かれ、内務技師阿部清紀氏が此所の所長となった。或の日私の席に来て云わるるには、利根川の維持管理を担当することとなつたので、関係の地方庁に今後のことについて夫々打合せを了したが、沿岸地方民には内務省の維持管理と云う内容が徹底せず。利根川の改修工事が竣功したときと云うが、相変らず内務省が工事施行を担当せらるるのには、不十分な出来形の所を次々と繕いをするということだろうと、竣功の工事全体に疑惑を懷いている様である。就いては此の際、利根川改修工事の竣功式を挙行したいと話されたので、私は洵に善い思い付きだが、真田所長さんの御考えはどうだろうかと思ふと、未だ伺っていないと云うので、然らば同行して所長の御意見を確かめようと話が一決。相共に所長室に伺つて、阿部技師から内務省直轄の維持管理と沿岸地方民の感懐の実情を縷述して、この際竣功式を挙行するの要あることを力説された。

真田所長さんは悉く同感の意を表され、更に関係が一府四県に渉るから、竣功の挙式費も相当額となるだろう。然し改修工事に関係のあつた方々は幾等多数となつても、皆が参列

せられ工事の竣功を一同で喜んで頂きたい。就いては挙式の所要費は出来る限り節約して計画することとしたい。又内務本省は如何様に考へておらるるだろうかと思ふので、私は所長さんが中心となり関係五府県が協同執行と云うことで挙式の一切が確定した上で所長さんから土木局長、次官、大臣に報告して承認を受けるように致したい。斯様に致せば計画樹立の促進上にも将来又規模の範圍やその他の決定も簡易に纏まりが付くと思ひますと答へた。所長さんは自分は主導者となることは所長の職責上本懐至極であると喜ばれ、本省方面は君に一切を可然御委せすると云われ、この席上で早速五府県土木課の主任者会同の招請状を発送し、東京土木出張所に於いて所長主催で竣功挙式執行の協議会が開かれた。そして各府県の希望を聴かれたが何れも大賛成であり、種々の注文もあつた。第一回の会合を終り、次で所長、阿部技師、私と各府県の希望を尊重して多少の取捨折衷を加へ原案を作成し、第二回の協議会に於いて原案通り異議なく確定し、栗橋上流の河川附屬地（これは真田所長さんの選定カ所）の広場に於いて、関係府県から、参列者二千余名、内務大臣、内務次官、土木局長、同局員、貴衆両院議長、及関係府県選出の貴衆両院議員、関係各府県知事、同内務部長、土木部長、同課員、関係府県會議員等の参列があり、式場は寸隙の余地なき程の盛況裡に利根川改修起工以來四十五年目にこの芽出度

き竣工式となった。真田所長さんの喜びは左こそと想像され
たし、所長さんはこの一日中笑顔を續けておられた。

この挙式に就て真田所長さんに関し特記しておきたいこと
は、

1、改修工事に関係のあつた方は洩れなく参列して頂き喜
びを俱にしたいという総同和の人情情美が顯れている
こと。

2、挙式の場所には小さな水神社があり、地方の方々が常
に水害なきようにと希願されておるから、今回広汎の
区域から参集せらるる二千余人その総ては治水の念願
者であり、相共に既成工事が健在できるよう神の加護
を祈るという敬神思想の発露であること。

3、竣工式記念品の選択（金額に限度があるので非常に苦心し
た）に当り銅製銀縁の五枚一匁の茶托に決定し其の内
側の桜椽には埼玉、千葉、群馬、茂城、栃木と利根川
沿岸の各代表（一県一枚とし千葉県を代表せしめる）桜椽
を真田さんが選定された。これは銅製茶托故に保存が
永久であり、老幼男女が喫茶の都度、各々がこの桜椽
を眺め合い、利根川改修の恩恵と其の永続するには、
維持管理の緊要を想記するようにと選考された其の真
情は、利根川治水の永遠に互り思を致された崇高なる
深慮の現れであること。

或の週に一日置き位に真田所長さんが中川技監の室に來ら
れ、一時間余も密談を遂げらるるので、何か人事上の大問題
が突発して、其の措置に就いて会談を重ねておらるると想像
しておつた。私が事務上のことで技監室に行くとき急に話を取
止められるので愈々疑惑を深めたのであつた。

栃木県下で内務省直轄施行の鬼怒川上流五十里ダム工事
は、着工以来、万難を排して工事の進行に努め堰堤の床堀が
半以上も進行したとき私は土木局長に堰堤工事の進捗状況を
申上げ堰堤工事はその基礎が最も重要であるから、この際、
実現される様にと献策したところ、局長は早速では明後日君
の同道で視ようと云うこととなつたので、東京土木出張所、
栃木県庁にこの旨を通知し又中川技監にも申上げた。

当日局長、技監、所長さんと私と同行で現地に参り、堰堤
床掘りの現場、右岸の堰堤取付岩盤の箇所と余水吐水路工、
在岸の県道附替地を踏査し更に上流部の湛水池となる広漠た
る地域を見て、最上部冠水の限界地点踏査し、夕刻鬼怒川
温泉旅館に投宿し、夜食後は基会を催すこととなり、この一
室を借り受け基盤三面を準備し一同で賑々敷く夜食を済し、
これより基会に移ろうとするとき中川技監から私の衆室を促
されたので行くとき真田所長さんが対座されておつた。技監か
ら特に秘密に話したいことがあるので局長と知事にこの室に
御出を願うよう君が取計ってくれ、そして御両人が來られた

「君も同様して、大抵以外の人は何人も入室せぬよう君が監視するようにと話された。そこで早速局長、知事にこの旨を申上げてから囲碁の室に行き、要談のこめ、局長、知事と私は暫時参加出来ぬから皆で囲碁を開始せらるるように話し、急ぎ技監の室に行く」と局長、知事が列座せられていたので、私は出入口近くに座した。

真田所長さんが五十里堰堤施設地の大きな平面図を披げ終ると中川技監が緊張の面持ちで徐ろに口を開き、実は今日御実視を頂いた堰堤工事のことであるで、先月初め右岸の堰堤取付となる岩盤（局面の所在ヶ所を指し）の中央に余水路に直結する縦穴を掘さく中約〇米に掘浚を進めた所、夢想もせぬ土砂が現れ、更に進めると土砂に泥水も混入する有様なので、当初堅牢無比の大岩盤であり、堰堤取付には無比の存在と信じていたが縦穴の掘さくで、この岩が往古にあった大水害の際、何処からか転落してこの場所に附着したもののようにであり、現地の岩盤附着の周囲の模様及び周囲の地質等詳細に調査検討の結果、転盤であることが愈々明瞭となりました。そこでこの岩盤が取付不可となれば盤の周辺の地形は急峻であり、堰堤設置が不能と云う結論に達した次第で、本日折角御実査を煩わしたが廃工とする外、他に措置の方法がありませんので此儀篤と御了承を願いますと述べられた。次いで真田所長さんから縦穴掘さくの経過、掘り出した土砂の

種質から自然の岩盤でなく転石であること次いで堰堤の重要な一部分とする補強工作をとした場合の工法と其の何れの工法を施すも将来堰堤維持の上に不可である理由、次いでこの巨盤を捨てて他に堰堤取付の基地なき現状である等極めて詳細に説明された。

列座の一同唯啞然として言葉なく、稍々あつて局長から先月初めに斯様なことが突発したのに何故、今日の今まで何等の話もなく打過ごしたことは不都合千万であると叱責された。技監は御叱りは御尤であります、実は事態発見後極秘に各種各様の調査と研究を重ね日夜苦慮を重ね今日と相成った次第、誠に申訳ありませんと陳謝された。それから堰堤の構造や岩盤の補強、堰堤位置の変更など数々の話題となり、局長と知事が（栃木県は堰堤工事に就て関係の他府県に比し高額の堰堤の施工に熱望された）話合の上、適当に岩盤の補強を加え堰堤を築造してはと提言されたのに対し。

真田所長さんは、左様な方法で堰堤を築造することとなれば強て反対は申しませんが、その時は自分の現職を罷めさせて頂きます。工事施工の責任ある所長として岩盤にあらざる転石、而もこの石下の〇米から土砂や泥土が出たという安定に確信なき瑕疵のあることを知って、それに巨大な堰堤を取付けるといふことは技術者たる自分は施工の任に当られませ

ん。何年後の何時のときか、この瑕疵が原因で堰堤に異状を来さないかの保証は出来ません。斯る不安を包蔵する施設は技術者たる良心の苛責に堪えませんので、此儀を篤と御願しますと毅然たる態度で申述べられた。この一言で工事続行の論議は全々解消され、堰堤工事を廃止することが確定された。真田さんが職を賭して技術の真正を確守せられた勇断は誠に以て敬仰に堪えぬ次第である。

真田先生を憶ふ

田 村 勝 好

一月二十日払曉まだ就寝中、突然大森の真田さんの令息、弘君から今父が急死した、直ぐ相談に来て呉れとの電話、全く寝耳に水、早速馳け付け始終を聞いて一層吃りした。

数日前近親を集めて米寿を祝宴を張られ、仲々の元気で其記念寧真が出来上ったのを前夜知己に頒布して追加分を先生自ら封筒を造って切手迄貼って朝、投函するよう家族に言付けて床に就かれた間もなく、息苦しいととて直ぐ近所の医者に見て貰った揚句絶命されたほんの瞬間の病で、まだ其儘の御寝姿を拝しても、少しも平素と変りない温顔其儘、少しの人手も借りることもなく実に安楽な大往生を遂げられたもので、最後迄先生の御人柄が察知された。

半世紀に余る慈父に勝る御薫陶を受けた私は次から次と追想交々湧き出でて一入悲嘆の涙に咽せぶ、只々瞑福をお祈りしました。

私は前々から蒲田に住んでいて、真田家とは遠くはないが、今孤独生活で、其頃横須賀の件の家から東京に通勤していた。偶々前日は帰りが遅くなったので蒲田で泊っていた所へ電話を受けた訳で、何だか先生が私との御袂れを惜んで足止めされたような氣持が浮いて来た。

先生は早い頃から謡曲は稽古されていたが、他の趣味、娯楽は何もない、酒も煙草も好まぬ人で専門の読書と仕事の研究が唯一の楽しみであった。仕事の事になると熱心な猪突主義でとことん迄深入する英雄氣風の人格者であり、知人の間では若し先生が退職したら、老後退屈で身を持て余して困るだろうなどと噂したものだだったが、先生は晩年東洋的な漢詩書画骨董に興味を持たれるようになり、持前の性格の熱心さがずぶの素人から大成して、今は一角の玄人の域に達成され、夫れ等の集合や鑑識会などに絶えず出入さるるようになり、其方面の交遊や作詩などで心境忙しい晩年を過ごし得られ人々を杞憂に終らせた。先生としても御幸福であられた事と思えます。

私も疎遠勝で偶にはお宅へ御伺もしたり又私の方へも御遊びに来られたりされましたが、書画に没頭されてからは其機

金も段々薄くなりました。旧交会には殆んど出席されましたので、其会合を楽しんで居りましたが、俄に幽明境を異にし、実に寂漠の感に堪えません。

回顧すると明治四十一年、私が大防出張所へ就職の辞令を受けて淀川改修工事に勤務を命ぜられた時、工区主任であった真田先生が初対面で赴任の御挨拶を申し上げますと、眼鏡越しに睥睨して君は何か得意があるか、希望は何かと聞かれ何もありませんと答えたら、夫れでは暫く此所に居て手伝えと申され、当時先生はトコービールの実験研究に専任され、私は何時も現場へ連れられて色々の勾配の坂路を造ったり、トロに力量計を取付けて押して見たり這らしたりを日課のように手伝わされた。夫れが後年先生の学位論文の基礎になったのが、当時私は何も判らずに唯馳け廻ったものです。

堤防に木を植えると将来法芝が枯死して崩壊の基となるとお許しにならなかったが、之は別の意味だとして（其頃の淀川では大阪天満橋から伏見通いの定期汽船航路があった）改修工事で今治川と桂川との背割堤防が完成したを機に先生は滋賀の田上砂防から松の苗木を取寄せて堤上一杯に移植された、之が成長したら夜間航行船の標識になるためと云うのであった。数年前私が旅行の序、望見したとき一面鬱蒼な緑林に成育している、往年の偉業末世に及ぶ感激を新にしたものである。

先生は利根川へ来られても鬼怒川との導流堤の尖端にも夜間標識として松教株を植樹され、之も亦成長して今は憩の場所と目標の役目を果している私は最近仕事の関係で此方面へ出掛け先生を思うの念切なるを覚ゆ。

先生は若い時には吃音で思うとより言葉の表現が困難な人であった、少し興奮すると一層激しく怒る癖があって、夫れが昂ると手を出したりして失敗を演ぜられたこともあった。部下でも随分叱られた人もあるが、仕事には熱意と研究を怠らぬ誠に造詣の深い方で、平素は若い者には実に丁寧、親切な良き補導者であった。私共も長年に亘り、実に至れり尽せりの御恩恵を蒙ったものであります。

先生は建築に特に趣味を持たれ、勤め先の行く先々に自分で家を建てるが、必ず方位家相を研究される。一応の間取などを決めた上、先生が私淑する兵庫西宮の家相の大家に設計図面を示して添削して貰った上でないと実施しない。私も大正の頃建築を相談したら、此事を進められ随分弱ったものだった。科学者でありながら迷信丈は別と見える。

元来先生は名門の出で何不自由なく育った人だが大体蒲柳の質で若い頃弱かった。東京転任後間もなく胸を痛めて茅ヶ崎の南湖院で永い療養生活をされ、すっかり治癒して退院早々洋行された程で、以来衣食住には特に気を付けること人一倍、無理は極度に避けられた。朋輩の方々は殆ど物故された

のに、独り長寿を保たられたのも先生の徹底した保養精神の賜ものでしょう。

私共も先生の趣味を受け継いで永く天寿を全うしたいものであります。

御遺骨は四月三日鶴見総持寺の墓所に埋葬され、私も其儀式に参列の榮を得た、英霊永えに御安泰を祈る。

真田秀吉先生の思い出

坂 田 昌 亮

時折り旧交会に出席する機会を持つが、多くの場合真田先生の英姿に接した。これからは、もうお目にかかれぬかと思うとほんとに悲しい。先生は旧交会出席回数では御長命の關係もあろうが、恐らくトップクラスで、最も会を愛し後輩を思遣って下さった先輩だと思ふ。

十年位前先生の郷里広島県三原市にお訪ねしたことがある。疎開されたまま留まっておられたようで如何にも旧家らしい構えのお宅の閑静な離れに悠々自適しておられた。お好きな漢詩の談など承って数刻を過ごしお別れした。私の亡父が詩作を楽しんでいたのでお会いすると親仁の様に感じた。御自作の漢詩を数回、お便りと共に頂いたことがある。

私共が大正二年東京土木出張所に採用された当時、先生は

利根川筋田中工区の主任技師であつた毎年忘年会は柳橋の柳光亭で豪勢に催された。新学士の我々も其の末席に連なつたが、一座の中でも先生は中堅として光つた存在に見受けた。

大正五年には同僚と利根川筋を見学に廻り、中工区に立寄つた。同工区には先生の下に市来尚治、辰馬鎌藏、来島良亮、山岸安二の諸氏が働いておられた。今は皆さんが故人になつてしまわれた。当時は明治四十三年利根川大水害後、素暗しい勢で改修工事が進められていた。工事機械化の先鋒としてエキスカベーター（通称エキスカ）数十基が川筋で動き鉄筋コンクリート工事も漸く普久期に入つた時代で、真田さんは淀川で経験を積んで坂本助太郎技師（栗橋工区主任）と並んで先生株として新工法を指揮されておつた。其後東京土木出張所長に榮進され勇退されたと思うが、特に河川工学には深い造詣をお持ちで技術面の談になると、微に入り細かに指導されておつた。

私が満洲国におつた時分、一度視察にお見えになつた事がある。先生は書画、骨董にも趣味をお持ちのようで、その時お世話した礼にと、わざわざ五岳山人（大分県出身南画家）の一幅を贈つて戴いた。記念に保存している。

去年は辰馬さん金森さん宮川さんを失い、今年は真田さんと次々に先輩とお別れしてゆく。既に七十歳になつて自分の番が近づいているのを忘れて泌み泌み淋しく思う。

心から遙かに御冥福をお祈りします。

(荒尾市寓居にて三月二十三日記す)

真田先生と傾斜した杭

片 山 信 雄

私の真田先生にお目にかかったのは、大正八年の十二月でした。私は明治末期から土木局調査課に勤務していたのですが、ちょうどその十二月に、大阪土木出張所へ出向するよう内命があったのです。大阪に行くと、大正七年度から着手されてゐる淀川の増補工事に従務せねばならない。それは私にとって初めての工事視察現場なので、せめて出向するまえにどこかの河川工事の現場を見学しておきたいと思ひついたわけです。当時の調査課長は比田孝一さんでしたが、主席技師から課長に口添えして頂いた結果、利根川全川の改修工事を見学するため、実に十一日間もの出張命令を出して貰うことができました。(余談になるが、当時、判任官に対して職務以外のこんな見学出張のような命令がでたのは恐らく初めてのことと思います)

さて、私の利根川初見学は、たまたま栗橋工区が振り出しでしたが、その時の工区主任が真田先生であつたわけです。初対面の私がおそるおそるあいさつしますと、先生から出張

の目的は何かと尋ねられて恐かったことを今でも覚えています。それから上流八斗島から下流銚子港まで、団平船、徒歩あるいは自転車やガタガタ自動車で、十一日間四十数里の行程で目的の見学を果たしたわけで、各種工事ははじめ見張小屋や操業時刻標示の紅白旗の上げ下げの情況までつぶさに見学できて淀川初陣に際しこの上もない心構えを得られました。これも先生のお導きがあったためとありがたく感謝しています。その後先生は東京土木出張所工務部長から大正十三年三月大阪土木出張所長に榮転、昭和三年九月まで同所に在勤されました。その頃私は枚方の淀川増補工事々務所に務めており、時々巡視に來られた先生から、いつも淀川洪水敷の掘削跡の整理が出来てないことを叱られました。また堤防天端はどこでも乗用車で走れるようにしておくようにとよくいわれたのですが、工事中のせいで、粗朶を天端に置くやら、坂路をつける予算もなかったりで、お言い付けが守れず困りました。次に工事設計書の書き方については、メートル法を実施された上、設計説明も計算表も、すべて縦書で示すことを命じられましたし、そのうえ図面は青写真を絶対認められず、三通でも四通でも必ず美濃のトレーシングペーパーに一一々浄写せねばならず、これには関係者全員たいへん悩まされたものです。この理由は青写真を使用すると設計書がぶあつくなるからいかんということでした。また赤の彩色には、レ

ーキを使用せずバーミリオンですること。とか、図面の折りたたみ方にも一定基準を示されました。要するに先生はなかなかキチョウメンな方で、大阪土木出張所管内二府九県に互る三十数個所の事務所や独立工場は、真田旋風にへギエギしたものです。

越えた昭和八年三月でしたか、淀川低水工事の継続施工が認められることになったので、本格的に実施設計を樹てねばならなくなり、私は特に利根川の低水工事の実施状況を本腰を入れて見学せねばならぬことになりました。それで同行者の小谷太一君と二人で、当時転じて東京土木出張所長になっておられた先生を先づもってお訪ねしたことがあります。このときは、先生は御多忙中にもかかわらず、三十分間以上に亘って懇々と各種の水制工について教えていただきました。

当時私はいわゆる透過水制工について、先生の名著「日本水制工論」あるいは淀川右岸の大塚（枚方対岸高槻市）附近や利根川筋の代表的の個所の水制工等を例にとり詳細に説明してある先生の小冊子によって、先生御提唱の護岸、水制設計上の要諦ともいふべきものをかなり把握していた積りですが、しかし三十分間の先生の御教示中に得難い次の一語を聞かせて貰ったことを今でも覚えています。それは合掌杵は「傾斜した一種の杭」だということです。「これは誰も、どの本にも書いてないし、また、誰とも話合っていないが、合掌杵も

一種の杭打水制だとわしは独りでそう思っている。つまり急流河川では杭打ちが出来ぬからあのように合掌杵や猪の子類で傾斜した杭の代用の働きをさせているのだ。だから合掌木の角は出来るだけ長く出し、また詰石は最少限度に少なくすることが肝要だ。もし角を短くして詰石を充満させれば杭の代用にならぬ」

次に昭和十二年頃と記憶しますが、私が大阪土木出張所の工務係長時代に、突然先生が役所に来訪されました。所長の高田さんも工務部長の田淵さんも出張不在でしたので、先生の接待には私と測量係長の木村小市君と二人で当りました。そのとき先生の申されたお言葉はこれも忘れることのできぬものでした。「わしは技師がいうようなことだが、一々書き残してみんなに伝えて貰いたい」と前置きされ、何を言われるかと思つたら、土工ビールのクロッシングのことでした。

「六籽軌条のクロッシングには九籽のクロッシングを、九籽軌条のクロッシングには一〇籽のクロッシングを、「つまり一段ずつ大きいものを使用しておかぬと脱線事故が起り易い」

またその他わが国で初めて使用した浚渫船のことについて広井勇さんや鈴雅次さんのお話しも出しましたが、その内容は記帳しなかったのを忘れてしまいました。それから、古い昔のことについては男女を問わず百姓でも誰でもよいが八十歳

以上の人に会ったときなんでもよいから昔の話を聞かせて貰うことだといわれました。

先生は、内務省在官三十六年間に大阪と東京の二ヶ所のみで終始しておられ、そして大阪、東京の御在勤期間はほぼ同じですが、大学御卒業後直ちに淀川に赴任されて十三年間もおられたので、淀川の現場のことには特に詳しくあったのは当然です。現在、三川合流点、宇治、木津阿川の隔流堤に風雅の姿を見せている松並木も実は先生が当時植え付けられたものの名残りあります。そのため東京に御転勤になられた後でも相変らず淀川を監視しておられるような気がしたものです。殊に淀川第一期の改良工事当時のことについては、坂本助太郎さんが早く逝かれたため、私など数年前に、旧中杭設置のことについてお尋ねしたこともあったほどでした。

それから昭和十六年頃と記憶しますが、私が大阪府へ転じて神崎川改修工営所に勤務中、先生は、当時の河港課長稲浦鹿蔵さんの案内で、神崎川上流支川の安威川、茨木川の工事現場を視察せられたとき、先生は車から降りられて河岸を一目見られるや否や、「護岸根固めの杭天が高すぎる」とはき出すようにいわれたとき、私はなるほど！と痛感いたしました。以来私はどの川を見るときでも常に先生がお側におられたならば何とおっしゃるであろうかと思うようになりまして。その日、あとで、先生は「およそ河川以外の土木技術者

は、道路でも鉄道でもまた港湾に限らず学窓を出てから三年乃至五年以上河川工事の現場で練達した指導者によって河川本来の特性を充分修得した上でなくては他のそれぞれの土木工事の計画、施行に従事出来ないことにしなければならぬ」といわれました。

さて、話は最近のことに飛びますが、私が昭和三十二年七月土木学会関西支部の事務局へ勤務するようになりましたので、そのことを先生に御報告申し上げましたとき、土木学会の関西支部は先生が大阪土木出張所長時代に創立したものと、当時の状況をこまごまと記したおハガキを頂きました。その年の暑中見舞状にも同じく関西支部創立当時の模様の統報をお寄せ頂きました。それにヒントを得まして、三十三年が関西支部創立三十周年にあたることに気付きまして、九月十五日老人の日を卜して、関西支部創立三十周年記念座談会を関西支部ゆかりの大阪堂島の中央電気倶楽部で催した次第であります。そのとき初代支部長であられた先生の御臨席を特に懇請いたしましたが行きたい気持は山々だがこのたびは差しひかえると、往時の御感想を十枚ばかり送って頂きました。それから昨年三月二十九日交通問題講習会終了日の講師との懇談会に、代々の支部長をおまねきした際、丁度御親族の婚礼が大阪で行なわれた関係もあって、久々に御西下せられ、御着阪当日は先生の想い出深い毛馬の閨門にもわざわざ

ざお立寄りになりました。また大阪の旧交会にも御臨席、予てこれが建立に主導的立場をとっておられた沖野先生の記念碑についても委しく御説明くださり、御婚儀後には御郷里の広島県三原市へ赴かれて、帰途再び大阪に下車されて、関西支部の講師懇談会に御出席になり翌朝大阪駅発で御帰京されました。私は一人淋しくホームで御見送り申し上げましたがあれが最後のお別れになったとは全く夢のように感じられます。まだまだ先生の想い出は尽きませんが取り急ぎ思い出すまゝを綴りました。

終りに臨み、先生の御生前中、軽輩の小生に対してまで破格の愛顧を賜りましたことを身に余る光榮と、今は亡き先生に感謝申し上げまして擱筆いたします。

昭和三十五年二月七日夜

涙筆

やさしい真田さん

田 淵 寿 郎

真田さんが突如として逝れた。丁度伊勢湾台風について旧交会から意見を求められて書いてある処へ訃報に接したので、其内に少々公の事を書いて置いたので此度は私事について書いて見たい。

私が秋田出張所から大阪に転勤を被命、取敢えず単身で赴

任した。独りで行った事でもあり、勝手を知ってる大阪の事として簡単に汽車から降りて電車で出張所へ行って真田所長に挨拶に行った、処が室に入ると直に「- 君が見えんかえが」と云って何だか手旗の様な形をして居られる。キョトンとして所長の顔を見ると至って御機嫌が悪い、聞いて見ると真田さんは田淵の顔を知ってる者が居ないので「田淵様御迎」と書いた旗を持って所員を駅へ迎へに出された。それを勝手知ってるまゝに飛び出して電車で行ったものだから迎える者もないものと思つてスゴスゴ返つたとの事、折角やさしい所長の御好意を無にして自分は赤面した。それでも直ちに御機嫌をなおされてやさしく、之れからの大阪出張所に於ける勤務の心得を話された。着任第一に所長のやさしい処を見せられて何となく今後の大阪での勤務に希望と光明を与えられたのを覚えて居る。

御家庭の話、或時御家庭を訪問した事がある、それは先般逝去された二度目の奥様を貰われて間もない時であつた。真田さんは此時奥様を貰われたについて此んな事を云われて居られた。「子供も大きくなって最早継母にいじめられる事もなくなつたので、此度家内を貰つた」との事であつた。真田さんは御子様方の継母にいじめられる事を心配されて御自分の不自由を忍んで子供さん第一として居られたらしい。漸く大きくなられたので、公私多忙の折柄として奥様を貰われたと

の事、此やさしい御心持が以心伝心で御子様方も至って立派に御育ちになり、又二度目のお母さんとも羨ましい程に円満な御家庭を作られた事は皆々御承知の通りである。

現場視察の話。或時紀ノ川の計画について和歌山に來られた。自動車で出来る丈け詳しくと思つて細い道に迄入つて行つたので遂に一寸降りて貰わなくては自動車が行けぬ様になつた。此時、真田さん云わく、お前達の熱心な案内は有難いが他所から來られたお客様には、此んな所迄案内して万一の事があつては申訳がない、氣を付けた方がよろう、と云われて若氣の一杯のゆとりのない事を戒められた。

此んな調子で何時も若者を導くに至れりつくせりであつた。真田さんが遂に逝れて今は叱つて呉れる親爺のなくなつたのをなつかしむ子供の氣持と同様の淋しさを感ずるのは恐らく私丈ではあるまい。

お前達あまりオレの側へ近寄るなど、オレは肺病だからな、とよく云われたものだ。此やさしい御心持を持つて御養生につとめられたお方が米寿の御祝をすまされて間もなくほんとに突如として眠るが如く逝れたと云う事はよほど前世によい事をなされたにちがいない。それに現世に於いても優しいお方であつた事は世にも珍らしいお方と今更の如く思慕の念にたえない。

先生の肖像画を画く

金子源一郎

真田先生が長い内務省のお務めを退そかれてから、あとで私は東京府から内務省に入つた様な關係で、先生から仕事の上での御指導を戴くことは出来なかつたが、土木技術界の大先輩として、旧交会なり土木学会なりで屢々御目にかかり、特に先生の御趣味とする古書画の面を通じて、色々と御指導を受けることが出来ました。

昭和十四、五年の頃でしようか、或日の土木学会の集りの節に先生が細長い軸物の箱らしいものを持って居られたのから御趣味の話となり、其後方々の展示会や、書画屋さん等に御案内下され、私も時には一、二の幅を買い取りましたが、戦災で總て失つて仕舞いました。

先生の御好きなのは頼氏の書と所謂南画と称する余り綺靡とは云えない、多くは墨丈で画いたもので、一般の嗜好から離れた、従つて比較的廉価なものでした。私もそういう画が好きなので自然話が合ひ、展示会等にも御誘ひ下さつた訳であります。

先生は御承知の様に万事学究的な方なので、良く御調べになつて、詳しく画家の来歴、画格、時代等を御教下され、

参考書等も御貸与下さったが、記憶のにぶい私のことであり、中々覚えられなかったが、手に入れた幅の画家のこと又は覚えるので段々と事情にも通じて、話の御相手も幾らかは出来る様になりました。

私も昭和十七年に内務省を退き、三菱地所KKに入り九ビルに勤めることになりました。九ビルの八階に丸ノ内クラブと云う、丸ノ内に事務所を持っている人達の集るクラブがあり、其処の趣味の会の南画会に入門し日下部道寿師の稽古を受け四君子の手ほどきから始めました。

戦争末期から先生には御郷里の三原の方へ移られ、東京には時折り御見えになる位でした。或時御上京の節に、私が南画の稽古をして居る旨を御話した処、其れでは見てやろうと云うことで目黒の拙宅迄御出になり、其れ迄に書き溜めたものを御覧下さいました。先生は其の際詩作に熱を上げて居られ、其のお話が色々ありました。其れでは私が、画が出来た時に二枚宛三原へ郵送申すからどれか一枚を御手元に留め、他の一枚に賛を書き込んで当方に送り返して戴くことに御約束致し、其れから二、三回実行したと思ひますが永くは続きませんでした。

其の後先生には再び東京に住まわれる様になり、時には書画屋さんに御つれ下され、又私は目下部門下の展覧会を見に三越に御伴致しました。

先生に接する毎に瘦軀長身枯淡な御風姿、東洋的脱俗、高士の御風貌に敬慕の念を懷いて居りましたので、自分の画技の足らないのを省りみず、一昨年の秋頃先生の肖像を画きましようと思つたのであります。先生には直ちにどうか、では画いて呉れと気軽に其の姿勢を取られた、どうやら半切に胸像を画きました。其れをお宅に持ち帰えられ御家族の方々に御覧に入れた様です、旧交会にも持参され会員の方々にす見て頂いたが、どうも出来が悪過ぎました。先生はどこか似ているよ、これで良いと云われたが、私自身何としても気に入らないので、も一度画かせて下さいと申上げた処、そうかい其れでは又画いて貰おうと云われ、御写真を二枚持つて来られて之れを参考にせよ、眼鏡は掛けて居る方が良からう、前のは外した所であつたが等、私の熱心なのを見て少しく興味を持たれたらしく今度は色々御注意があり、御自分から榛原で画仙紙を求めて来られました。其れが昨年の二月頃のことであつたと思ひます。思う様にはいかないが其れでも前のものより幾分良く画けたので、今回は一応之れで良いことに致しましようか、表装して差し上げましようと思ひ出ましたが、良ろしい自分ですと仰せられてお持ち帰えりになり、上部に題を書き入れられ表装されました。其れが巻頭の写真のものです。

其後五月に催された帝都ホテルの旧交会大会に御持参にな

長青 曾公 卷し 紙 落
 少 山 出 知 海 國 京
 空 刺 多 年 一 決 水 鼓
 額 出 八 十 老 書 生
 藝 自 像 此
 此 爲 人 會 所 不 氏 公 勉 意
 所 爲 也
 昭和三十三年二月
 金 子 源 一 郎



此の肖像画は昭和三十四年二月に先生が丸ジルの私の事務室に見へられた節
 私が写生したものであり、上部の題は先生御自身の筆になるものである

金 子 源 一 郎

ったので在京田交会の方々は既に御覧になったと存じます。

計報に接し、直ちに参じ、生るが如き永遠の眠に入られた温顔を拝し感無量で御座いました。其節女婿の楠瀬様から、今年は義父の米寿に当るので、正確には五月であるが早目に一月の十六日に其の祝の会を近親丈で催した、其の際父にはあの肖像画の軸を携え披露された、との御話を伺った。どうやら御氣に召したらしいことを知って私も甲斐があったと聊か安堵した次第であります。又先生が晩年御編纂になられた内務省直轄土木工事略史・沖野博士伝の見返しに何か画けと御注文があり、河と海に因んだ二、三の下画を御覧に入れました。其れからあの画を選ばれたのであります。私が昨年六月に首都圏整備委員会の常勤委員に任命されるにつき、十七年間勤めた三菱地所会社を止めることになるので御相談に上りました節、其れも良からうと仰せられ、話は又古書画に移り二階迄御案内、御自慢の書幅を見せて戴き色々御教示を受けました。大分かけ離れた先輩でしたが、私には存外近より易い慈父の様な懐しい方でありました。先生の御一生は正に我國の公共土木事業に捧げられたもので、閑地に就かれた後も前記土木工事略史、其他長老として洵にふさわしい、先生ならではの出来ない御仕事に尽力され貴重な記録を整理されたことは後進にとり有り難いことでした。傍ら悠々詩作、古書画の鑑賞に余生を

樂しまれ、八十八歳の御高令迄何等の御不自由も無く、亡くなられる前夜も御家族団欒晚餐を採られ、御就寝数時間後に御急変と承ります。洵に理想的な御生涯と申すべく、願えるならばまだまだ百歳迄も長寿を保って、我々後輩の心の支柱となつて頂き度かつたのでありますが残念な次第でした。私共には到底及びもつかぬ望みですが出来ればあやかり度いものです。

先生から戴いた半切の「不慕功名不厭貧胸中貯在十分春一杯

不慕功名不厭貧
胸中貯在十分春一杯
茶味吾忘老
迎得八旬閑適民

乙未晚秋

真三山

杯茶味吾忘老迎得八旬閑適民「乙未晚秋 真三山(写真掲載)は先生の御心境を詠れたものとして大切に保存、時々床に飾って御徳を偲んで居ります。

御趣味の一端に触れる機縁を得た者として御懇情の程を記して謹んで追悼御冥福を祈り上げます。

以上

真田さんをしのぶ

神戸市長 原口忠次郎

私の内務省東京土木出張所長時代だから、昭和初年のことになる。元日、真田さんのお宅に年始にうかがい、屠蘇など御馳走になるうちに、談たまたま仕事の話に及んだ。

真田さんは、やがて、

「それでは、現場で説明してやろう」

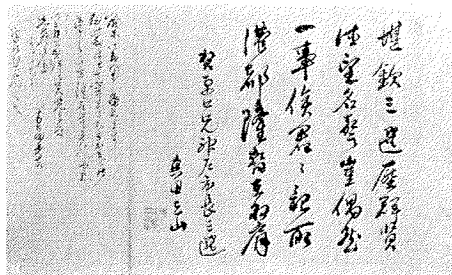
と、車を駆って江戸川放水路分水地点におもむき、寒風にさらされながら、さらに熱心に話をにつづけられた。

元旦早々のことでもあり、世間なみの挨拶がたちまち工事の現場視察に変わって、私は内心辟易しながら、真田さんの仕事にうちこむ熱とでもいうものに、ほとんど圧倒されるような気持だったのを覚えている。

真田さんは東京帝国大学、私は京都帝国大学と学校こみ違ったが、同じ土木工学々徒として真田さんは私の先輩にあたる。私は卒業後、内務省東京第二土木出張所勤務となり、荒川改修工事にたずさわった。真田さんはそのころ東京土木出張所の利根川栗橋・田中両工区主任として利根川改修工事に従事しておられたので、仕事の面でその後長く、いろいろと御指導を受けることとなった。

その後、長い年月のあいだに、勤務するところも変り、離合することはあっても、知識、技術の面にかぎらず、元日のときのような真田さんの真摯な仕事への意欲に、私は強い影響を受けてきたと思っている。

一身上のことをも絶えず気にかけていくたさき、三年前、私が神戸市長に三選された際には、さっそく懇篤な賀詞を頂戴した。



堪欽三選庄群賢

欽ニ塘エタリ三選シテ群賢ヲ庄ス

徳望名声豈偶然

徳望名声豈偶然ナランヤ

一事侯君之起所

一事君ニ侯ツ君ノ記スル

所(トコロ) (偏えに君に待つのみ、これはすでに君の覚悟する

ところの意)

港都降替在双肩

港都ノ降替双肩ニ在リ

(盛衰の意)

やさしく肩を叩いて激励してくださるような思いがして、

良い先輩にめぐまれたよろこびをそのとき、しみじみと味った。

昨年三年、来神され、久しぶりに元氣な姿に接することができた。そのとき、こういう話が出た。

昭和七年であったか、私が国道改良第二部長をしていたころ、私が主謀して友人とはかり、当時、東京土木出張所長であった真田さんを、さる会社の「社長」ということにして、銀座のカフェ「サロン春」にお連れしたことがあった。真田さんは、日常きわめて厳格な方であり、お叱りを受けないかと内心冷汗ものであったが、大変よろこばれ、とうとう「社長さん」で通して、終始なごやかな気分のうちに、誘いだした私たちの方が、かえつてたのしまされたようなことであった。昨年、お会いした際も、真田さんからこの話が出て、そのとき以上にたのしい思い出話となった。

その真田さんも今は亡い。天寿を全うされたとはいえ、なお、大切な方を失った淋しさをぬぐいさることはできない。

真田大先輩の思出

高橋 嘉一郎

真田さんの急逝は全く寝耳に水であった。昨年十二月九日

の旧交会例会で、来年は真田会長が米寿になられるので、その御祝をしようとしたし、春の大会の時がよいと衆議一決したのであった。然るに天時を藉さず、突如として御逝去なされ、実に残念であった。

関東地建からの知らせで、三十一日大森のお宅にお悔みに上った時、御令息に承れば、御逝去の四五日前令孫曾孫を交えて米寿の御祝をなされ、二十数人お集りになって、大変ごきげんよくお帰えりになった由、また御逝去の当日も夕食は常の如くお食べになり、明日は何やら会があるので出かけるというて居られた由。

私が伺った時は未だ御入棺前で、床に在られたのでお顔を拝見したが、眠れるが如き温容で、蓋し大往生と申すべきであらう。

さりながら後輩の吾々としては、吾々の企図したお祝をやってあげたかったし、又大先輩の殆んど逝かれた今日、豊富な御経験で吾々をもっともつと御指導して頂きたかった。本当にかえすがえすも痛惜に堪えない次第である。

私が初めて真田さんに御目にかかったのは、私が北上川改修工事に従事して居った大正十二年の秋頃かと思う。当時北上改修の予算不足となり、その増額のため調査に、さきに亡くなった比田さんと御一緒に来られた様に思う。比田さんの豪放磊落、真田さんの温厚篤実が対照的であった。

和年九年六月私が本省土木局勤務となった時は、その春真田さんは東京土木出張所長を退官して居られたので、時折土木学会などでお眼にかかる以外は警咳に接する機会がなかった。

終戦後真田さんや辰馬さんなどの御尽力で、旧交会が盛んになるにつれ、旧交会で御会いする事が多くなった。

真田さんは筆まめな方で、昭和十六年土木学会が「明治以後本邦土木と外人」を編纂上梓したが、その委員長は那波光雄さんで真田さんは副委員長となつて居るが、此実践の原動力となつて纏められたのは真田さんで二年以上もかかつてゐる。之は吾邦明治維新以来の土木工事の発達史とも称すべきもので、その功績は偉大なものがあると思う。近年旧交会で出版した沖野博士伝記に併せて、直轄工事業を出されたが、之は前記「明治以後本邦土木と外人」の河川港湾部の続編とも見るべきものである。

沖野さんは人も知る吾邦河川港湾直轄工事業の元祖で、初代内務技監であり、真田さんは親しくその御薫陶を受けられただけ、私淑する所も深く、此伝記発刊をここ数年念願とせられて居つたので、此点では御満足して逝かれたと思う。

直轄工事業については北上川や神通川に関連とて、何かと御質問を頂き、出来るだけ御役に立とうと心がけたのではあるが、不敏にして十分でなかったのは申わけないと思つてい

る。尚昭和二十九年頃、鹿島建設が施工中の五十里ダムを御案内し、川治温泉に泊つて頂き、大変御喜びになり、五十里ダムの歴史を伺つたのが今だに楽しい思い出である。

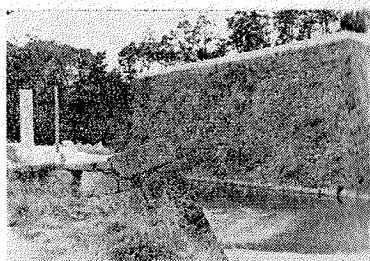
旧交会としてはさきに辰馬副会長を失ひ、更に真田会長を失つて寔に寂寥の感を深くしているのであるが、吾等は及ばずながら協力して旧交会の発展に努め、以て真田、辰馬両大先輩の遺志を継ぎたいと考えて居る。

昭和三十五年三月

真田さんを偲ぶ

西 尾 辰 吉

真田さんは私の父と同郷の関係から前々より御名前を承つて居たが、御目にかつたのは私が大正六年八月東京土木出張所に奉職してからで、当時利根川第三期改修の田中工区主任をして居られ、其後私は大正十二年六月、名古屋土木出張所へ転勤、昭和十四年六月再び東京土木出張所へ歸つて来た時は既に御退官になつて居られたので、親しく御薫陶を受ける機会はなかったが旧交会、学生会午餐会には毎月の例会に欠かさず出席されたので親しく其の温容に接することができ、卓越せる識見と豊富な経験を伺うことが出来た。私が昨年初夏、中国地方へ旅行の途次、墓参のため三原へ立寄つた



時、城趾の写真を撮って来たので差上げた処、三原に在住した頃、城趾を史蹟に指定するよう尽力して認めて貰い、此碑の文字も自分が揮毫したのだとの御話であった。斯く郷里のためにも種々力を致されたものです。一月の旧交会例会で本年は米寿に達せられるので五月の大会には御祝いを致すことをきめ、散会后二、三の人と地建局長室で雑談し御元気で御別れたのに、一月二十一日朝、地建より電話で昨夜逝去されたとの通知を受け、そのあまりにも突然であつたことに驚き、誠に敬慕の念と寂莫の感に堪えず謹んで哀悼の意を表する次第です。

真田先生と利根川改修工事

富 永 正 義

真田先生は我国土木界の長老として、はた又内務省直轄工事の先覚者として土木工学又は土木工事に遺された功績は誠に偉大なるものがある。その数多くの功績の内でも最も大なるものは利根川改修工事の完遂であると思われる。先生は明治

四四年四月大阪土木出張所から東京土木出張所に転任されて以来田中工区主任、利根川第三期改修主任および工務部長を歴任し、一度大阪土木出張所長に栄転されたが、昭和三年九月再び東京土木出張所に転じ、出張所長として利根川改修工事を完成された。先生は全生涯を我国治水のために尽粋されたのであるが、その内で最も精魂を傾倒あれたものは利根川の治水であつて、或は事務所主任として、或は土木出張所長としてその改修工事および維持工事に関与されこと実に十有九年の長きにおよんだ。

抑々利根川は明治四三年八月の大水にありては烏川合流地点に於ける最大流量が毎秒一一、〇〇〇立米と推算されるに拘らず、その改修計画に當りては計画高水流量として毎秒五、五七〇立米という二次的の流量をとらざるを得なかつた。このため工事実施の任に當つた主脳部は改修計画の脆弱性を暴露することなく、如何にすれば明治四三年八月の如き大水に堪え得る改修工事が完成されるかという悲願につきまといながら、多大なる努力を致したのであつた。筆者は十数年間利根川改修工事およびその維持工事に携つておつた關係上この対策についての苦心を当時の東京土木出張所の主脳部特に真田先生から伝え聞いたのであつた。

上記対策の主なるものは、(1)大遊水池の設置、(2)河積の拡大および、(3)堰防余裕高の増大の三点に帰するものと思われ

る。(1)については尾島工区に於いて一、七〇〇ヘクタール、栗橋工区に於いて渡良瀬川遊水地として三、五〇〇ヘクタール、田中工区に於いて田中管生遊水地として二、五〇〇ヘクタール、合計七、七〇〇ヘクタール。遊水地域を設置して洪水流量の遲滞を図ることとした。田中管生遊水地は当初田中遊水地に限られておったが、真田先生の発案で管生沼落を締切らないで、開放することに変更したので、遊水地域を約九〇〇ヘクタール拡大することが出来た。これと同様のことが尾島工区に於いても採用された。即ち同支石田川および早川は当初水門にて締切る予定であったが、霞堤によりてあけはなしにされたので、遊水面積は六七〇ヘクタールの増大を見た。

(2)の河積の拡大については旧堤が高水法線より後退してある箇所はこれを利用することにより極力河幅に余裕を与える方針をとった。このため利根川増補工事にありても栗橋工区では計画河幅を五四五米から六三五米に拡大しなければならなかったが、実際引堤を要する箇所は東武鉄道川俣鉄道橋以下村君村に至る間および利島村より香取村に至る間で、その他は改修工事当時の河幅で差支えなかった。又田中工区では当初計画高水量毎秒四、一七〇立米に対して標準河幅を五四五米と定められたが、その後江戸川への分流量が増加された結果計画流量は毎秒三、三四〇立米に低減されたにも拘らず、河幅は五四五米を踏襲されたから、栗橋工区よりは更

に余裕があることとなった。

又尾島工区は五四五米の高水法線の両側に各々幅員一八二米の遊水敷を設けたが、この遊水敷も整理掘削を施して断面積の増大を図ったから、尾島工区の河道は著しく洪水疎通力を増し、昭和二年九月の大水に際しては毎秒一四、〇〇〇米立米を安全に流過せしめることが出来たのである。

(3)の堤防余裕高については、当初計画は川俣鉄道橋を境としてその上流を一、八米、又その下流を一、五米と定めたが実施に当りては一樣にこれを二、四米に高めた。しかしその後の実測によれば、〇、三乃至〇、九米の沈下が認められたから、維持工事によりて二、一米以上を保持せしめる様、嵩置を施行した。

利根川改修工事に於いては堤防が強大に造られ、かつ掘削が完全に行なわれたのみならず、所要箇所には護岸水制が整備されたから、水当り箇所は洪水の撃突から防護され、なお水行も整正となるに至った。更に維持工事にありては漏水箇所は小段の増設又は杭打によりて補強を行い、かつ堤防の沈下に対しては嵩上を施行した。この外護岸水制は年々修補を加うると共に、なお必要ある箇所には新設を行うこととした。かくの如く利根川は改修工事によりて構成された強固なる骨組が更に維持工事によりて強化されることとなり、改修区域全体が洪水防禦の護りを一段と固めることが出来た。

上記の如く利根川は防水に対する態勢が充分整備された時、昭和一〇年九月二六日突如として明治四三年八月の大洪水を彷彿せしむるが如き大洪水が襲来した。当時利根川の維持工事を担当しておる東京土木出張所の所長は辰馬さんであった。筆者は当時内務省土木局に勤務しており、二六日の朝利根川大増水の報に接したので、直ちに東京土木出張所に至りて辰馬所長に会したが、たまたま真田先生も来り会された。互に栗橋量水標の水位を凝視しておったが、午前一〇時にはその計画高水位六、三三米を突破すること一、五五に達したので、非常に驚いた。しかし真田先生の顔には心配の中にも自信に満ちたひらめきがあった。先生が明治四三年八月の洪水を秘かに計画の対象として利根川改修の増強に心肝を砕かれた結果が今や判明する時期が到来したのであったが、之は又一面には先生の河川術に対する最大の試練でもあった。

河川の洪水位は最高に近づくに従って増水率が低減するから、之によって最高の近ずいたことを予知することが出来るのであるが、九月二六日午前中の増水率は伸々低減するようにも見えなかったので、増水は何時まで続くか予想がつかなかった。

栗橋量水標は午前一一時七、九九米となり、計画高水位を抜くこと一、六六米に達し、利根川の危険は刻々に迫ったの

で、筆者は二六日正午当時の土木局長広瀬久忠氏、河川課長武井群嗣氏と共に自動車にて栗橋に急行した。途中何時最悪の事態に際会するやも知れないので、一種異様の緊張感に駆られながら栗橋に近づいたが、遂に破堤にも遭遇せず、午後二時頃維持事務所に着した。その時の洪水位は最高より約二〇〇位減水し、堤防の表肩から八〇〇位低かった。栗橋に於ける東北本線の鉄道橋は計画高水位からの余裕高が一、四米余であったから、背水および流木等の影響もありて、最高水位時には軌条の上の溢流は甚大の由であったが、筆者の到着した時は幾分減少しておった。

結局栗橋量水標に於ける水位は二六日午前一一時を最高として七、九九米を記録したが、こたに呼応する最大流量は毎秒九、四三〇立米を算し、計画流量の一、七倍に達した。尚烏川合流点に於ける最大流量は毎秒一〇、二九〇立米と推算されるから、明治四三年八月一三日の最大流量毎秒一一、〇〇〇立米に匹敵するものであった。

利根川改修は人事を尽した世紀の大事業として一世の賞讃を博したが、沿岸民のこれにかけた期待は大なるものがあった。しかしこの期待を裏切るこの計画を遙かに上廻る大洪水と戦って、遂に光輝ある勝利をかちえたのであるが、この光栄は河川改修史上に永く記念さるべきものと思われる。

ここに於いて先生が長い年月見守っておられた利根川改修

は明治四三年八月の大水を彷彿たらしめる大洪水に際会してその使命を全うし、關東平野を泰山の安きに置いたのであるが、先生は苦心慢慥して築き上げた利根川堤防の雄姿を眺めつつ、よくも多年の念願を叶えて呉れたことに對して満腔の謝意を表すると共に、自らも亦こよなき喜びにひたっておられたことと思われる。

日進月歩

紫田辰之進

真田博士の御永眠はまことに唐突の事であつて、私は某新聞紙の記事で知ったが、当地では知らぬ人が多かった。全く意外の出来事で驚いた次第である。米寿の内祝を目度くすまされて幾日もたたなかつたが、御高齢で天寿を全うされた事は御不幸の中にも少しは氣が安らかに思われる。

昨春沖野博士の碑文を自ら選し、御高齢とも思えぬ雄渾な筆勢で揮毫され、それを携えて大阪にあった碑石を見分の爲めに來阪された時、近畿地建の淀の寮へ御迎えしたが、足こそ稍御不自由に見えたが中々御元氣であつた。夜行で來られ朝から關係先を訪問されたのは其の氣力と健康と且つ健啖にも敬服した。随つて之が最後の御別れとなるとは想像した

人はなかつたと思う。

淀川の最初の改修工事は明治三十年頃の着工で、我國河川改修に於ける機械化施工の草分けであつたので、其の建設機械並びに修理機械は當時米國の重工業よりも欧州の方が進歩して居つたのか貿易の關係があつたのか、内務省では技術者を欧州に派遣して、主として英、独、仏で調達、輸入した。

さて之れを取扱うにはオペレーターの養成から必要であり、真田博士等が日夜苦心努力の結果當時の低賃金による安価なる工費よりも遙かに安価に、一層速やかに完工出来る迄にされ、続いて利根川に於いて之れを改良して、我國の河川改修機械化施工の基礎を確立された功績は実に偉大なものであつた。

大正十三年大阪土木出張所長として來任された時に私は技師の末席ながら、光立寺機械工場主任であつたので直接所長に接する機会も多く、御薫陶を受けた事が多かった。

真田博士は後輩の指導には中々懇切であつて倦む事知られぬ様子であつた。私が若かつたから未だ記憶に残つて居り又実行して居る事も多々ある。

真田博士は博覽強記で些かも銜^{ぐらゐ}う事をされなかつたのは信仰による人格陶冶の結果であると信じて居る。

當時東京土木出張所に居つた人は中川所長の「メモ」を見做うて、所長の意見を「メモ」する習慣があり、東京出張所

出の同僚の一人が所長の説明を「メモ」しておいたのが程経て同じケースに出会ったので、其の要領で取扱ったら承認されぬから「メモ」を出して何月何日所長が話された通りにしたのですと申し出たら「日進月歩だよ」と云われて、皆が参ってしまった事があった。其の当時は所長の意見は金科玉条と心得て居た頃の事であるから、あと味の悪い気持であったが、今にして考えて見ると実にうんちくのある面白い言葉であった。

大正の末期から昭和のはじめにかけては我国の不況時代で失業救済に土木事業を起してなるべく機械を使用せぬことにしたが、其頃でも各種の新しい施工機械を研究し施工法の改良工夫を怠らなかつた熱心さは旧交会々員各位のよく知つて居られるところであり、又真田幸村と豊臣秀吉の両雄をコンバイレした姓名にふさわしい知恵者でもあった。

思ひ出はつきぬが謹んで御冥福を御祈り申し上げて筆をおく事とする。

昭和三十五年三月二十五日

真田三山博士 真田三山博士を哭す

鈴木健二

昨聞訃報忽相驚。 昨訃報を聞いて忽ち相驚く。

痛惜何堪永訣情。 痛惜、何んぞ堪えん、永訣の情。
官界夙専先達蹟。 官界夙に専らにす、先達の蹟。
詩壇已騁老成名。 詩壇、已に唄す、老成の名。
襟懷淡々兼氷潔。 襟懷、淡々、氷と潔く。
氣魄稜々与玉清。 氣魄稜々、玉と清し。
手把遺篇揮淚読。 手に遺篇を把つて涙を揮つて読む。
書燈暗澹夜三更。 書燈、暗澹、夜三更。

真田先生を憶う

遠藤貞一

真田先生と御懇意を願うようになったのは、私が旧交会の御手伝いをするようになってからのことで、特に会員として入会以来のことです。

私が昭和六年四月復興事務局から土木局入りした時、先生は東京土木出張所長の要職に就かれており、内務技手であつた下端の私とは、それこそ「お月様にすっぽん」といった地位にあつたので、直接の御交渉もなく殆んど御話をする機会とてなかつたのであります。特に御在官時代の思ひ出で之れというものがありませんでした。ところが先生が御生前時々私に「遠藤君あの時はナアー」と御話される只一つの思ひ出があります。

〔その一〕それは昭和七年六月中旬の或る日のことであります。現参議院議員小沢久太郎さんが東京土木出張所水戸国道改良事務所に内務工事として従務中（主任は現在汽車製造株式会社の重役をされておる鈴木清一さんが茨城県道路技師の身分で嘱託されていた）突如危篤に陥入られたので、時の東京土木出張所長であった真田先生の格別の御尽力で、小沢さんは他の同窓より一足お先きに特旨をもって同年六月十六日付で

任内務技師

釧高等官七等

十級俸下賜

土木局勤務ヲ命ズ

の発令があつたのであります。

私はその突発事件が御縁で先生に親しく御目にかかる機会を得たこととして一入感慨深いものがあります。

〔その二〕去る昭和三十三年七月十日赤坂プリンスホテルに於いて建設大臣主催の建設省創立十週年記念祝賀会があつた時、真田先生も招待されて臨席されておりました。終宴まで庭園に立ちずくめなので大分お疲れのようなので、私は自動車で新橋駅までお送り申し上げ、更にホームまでお見送りしたところ「俺をすっかり老人扱いするネ……」と微笑されながらおっしゃられたあの御気根、最後まで死をお考えになら

なかった先生の在り日を偲ぶでもあります。

〔その三〕また昨年八月末のことであつたと記憶しますが、高橋嘉一郎さんが建設大臣官房技術調査官室に私をお訪ね下さいまして「真田先生が、辰馬さんの追悼号を旧交会々報第三号の後部に付けるとおっしゃっているが、僕等は単行本として出したい。先生は君の云うことならよく聴くから、今直ぐ電話で諒解を得て呉れ」とのことなので、早速先生に御電話したら「ウンそうか、君に委かせるヨ」とのこと、実は辰馬さんの追悼号が昨年十月単行本として刊行された次第であります。その後僅か三ヶ月にして真田先生には突如急逝せられ、今ここに先生の思い出を書くことは全く意外とするところで、切に御冥福をお祈り申し上げて擲筆するものであります。

真田先生に叱られる

嶋 野 貞 三

大正一〇年学校を卒業して直ちに内務省東京第一土木出張所に勤務し、利根川橋の設計をしておられた青木さんの部下となつた頃の事である。同窓の榎部も兼務で手伝いをしており、外に湯田技手もいたが小人数のこととして設計や製図に多忙を極めた。吾々新米は先輩の側目もふらぬ仕事ぶりにびっ

くりしたが、尊敬する先輩の指導をうけ乍ら実際の仕事にたずさわる喜びを感じた。

架橋現場の栗橋へはじめて行ったときは顧問の柴田教授の御伴をしたのであったが、その時の案内役が真田さんであった。真田さんは利根川第三期工事事務所主任で当時の主任の中でも古参の方であった。橋の設計が略完了した頃、青木さんがチブスの為に療養中、真田さんが吾々の仕事の面倒を見られた。其頃現場では下部工事に着手しており橋脚の基礎にかかるので設計書を作れと命ぜられた。実は下部工事について何も関与していなかったし、役所の設計書がどんなものかも知らなくて困ったが、同室の或先輩に教わり乍らとにかく設計書らしきものを作って提出した。それを真田さんが見られて、私を呼んで曰く『御前は尺貫を知らんか』私は尺貫がわからなかったので先輩に教わって計算しましたと答えたが、どうも出し方が違っていたらしい。『わからなかったらおれに聞け』と叱られた。私は恐縮するより外なかったのであるが、それ以来真田さんがこわかった。

利根川の架橋工事で三年程栗橋にいたが、河川の事務所も近かったので尾崎さんや富永さんにも御世話になった。橋がほぼ完成して青木さんが欧米出張に出られた後は附帯工事や残務整理をやらされたが、仕事について真田さんの御指導を受けたことも少くなかった。真田博士は新しい工法や、新し

い機械について相談にゆくと、よくやって見ると云われることが多く、吾々の研究心を押えるようなことがなく、はげまして下さったことを覚えている。私は関東大震災のため最初の国道改良工事に関与しただけで、港湾工事の方に転換するようになったが、エンジニアの出发点でよい仕事にぶつかりよい指導者につくことが出来たことの幸運を時々思い出して感謝している次第である。

昭和三十五年二月

真田先生を悼みて

河 野 正 吉

その昔建設機械化のいしづえを

築きしは君真田先輩

克明にふみ書きて倦まぬ気力もて

われら励ましき真田先輩

漢詩よむ建設界のただ一人

逝きては淋し真田先輩

退屈を知らざりし人夕まで

筆とりつゞけその夜逝くとは

積善に余慶でふものありとせば

安らけき死は余慶のひとつ

交はりの深からねども何となく
その人柄に惹かれぬわれば

真田会長の思い出

井 関 正 雄

私が栃木県土木課長から内務省土木局に転動してきた昭和十四年の頃にて真田さんは既に東京土木出張所長の職をお辞めになった後で、従って親しくお話を申上げるような機会は全くなかった。只時々同僚や先輩達の間で河川に関するオーソリティとしての真田さんの噂を聴く程度に過ぎなかった。

私が真田さんに親しくお日にかかり、又直接お話を申上げたりすることの出来たのは極めて最近のことである。私は昭和二十六年に福島県の土木部長を退職して上京し、廿七年以来熊谷組に勤めることになったのだが、その頃は亡くなられた辰馬さんのお世話で旧交会に仲間入りをさせて戴き、毎月の例会に関東地建の局長室に集って先輩の各位にお目にかかって昔話を聴くのを何よりの楽しみにしておった。其後間もなく真田さんも御里の広島から東京にお移りになり、旧交会には殆んど欠かさず御出席されるばかりでなく、旧交会に会長を置くことに決った時、初代の会長に御就任を願うことになったので、更に親しく聲咳に接するのみならず会の運営や

種々の計画に就いて何かと御指導を戴くようになった。

御承知のように真田さんは常に優しい笑顔で訥々とお話をされるのであるが、その博識なこと、記憶力の確かなことは実に驚くばかりであった。殊に部下であった人々のことに就いては実によく覚えておられて、誰は何時どこで何をしたという様なことをよくお話されていたが、全く生字引とでもいう様な感じで興味深くお話を承ったものだ。

私が真田さんに就いて何よりも敬服したことは、その『熱意』と『根気』に対してである。既にお歳が九十に垂んとする御老体の身でありながら『内務省直轄土木工事略史、沖野博士伝』という立派な著述をされたことは、生来の緻密な頭脳と透徹せる記憶力の然らしむる所とはいえ、内に燃ゆるが如き熱情と根気が無くては到底出来ることではない。只々敬服するばかりである。

又去る三十三年頃だったか、沖野博士の記念碑を博士の郷里但馬豊岡に建設する話が出た時、真田さんは率先其の碑文を撰定され、又青山の石屋『石勝』にわざわざ自分で出かけられて碑石の選定から値段の交渉及運搬のこと迄、事細かに御自分で接渉されて、"そんなに金をたくさんかけなくとも出来るから是非実行しようじゃないか"と言って、皆を説得されて実現の運びに至ったその熱意に対しては我々後輩として只々頭の下る思いであった。

先年旧交会で行徳の水門の見学に参りましたところ、前述の旧川締切りで先生に大変に御心配御厄介をかけたました現場もすっかり姿をかえており、其当時を想い出して感慨一入でしたが、其折先生があゝの時は安藤君も若かったので芝池君を応援させたとか皆様に話されましたので私も冷汗をかきました。

また高校、大学の土木の集りにもよく御出席され若い連中を激励されました。

最後に御目にかかったのは、本年一月の旧交会で米寿を迎えられ、益々御元気で誠にお目出度いと拝しておりましたのに、旬日過ぎた一月二十日に急に御永眠されましたことは誠に残念にたえません。先生の御冥福を祈って筆をおきます。

勝利の人、真田博士に捧げる言葉

松 尾 春 雄

真田さんは次の聖句にある言葉を生きた方であり、天国においてもよい席を与えられる方である事を信じ、そのために祈ります。

なんじ死に至るまで忠実なれ、さらば、われ汝に生命の冠を与えん。

勝を得るものには、われ神のパラダイズある生命の樹の実を食うことを許さん。

(ヨハネ黙示録二章から)

真田先生を憶ふ

井 上 清 太 郎

真田先生といわれると、直感的に、あの関東大震災当日のことを想い起す。

私が先生に始めてお目にかかったのは、大正十二年大学三年の夏期実習に、東京土木出張所でお世話になった時である。実習先は、江戸川流頭に施工中であった関宿流江と閘門の現場。当時江戸川の工区主任は春木さんで、工場は五霞村にあり、主任は池田信さん、その下に八島茂さんと、技師になったばかりの榎部保さんが居られた。想えば遠い昔のことである。

実習中、工務部長であった真田さんに随行して、一度利根川の上流を見学させて貰ったことがあった。通った道順や視た工事については、すっかり忘れてしまったが、恐らく尾島辺から栗橋近くまでであったろう。後押づきの人力車に乗せられて、堤防沿いにお伴し、途中赤岩に一泊、自慢の川料理を鰯腹御馳走になったことだけは、今でもはっきり覚えてい

前後約五十日に亘る実習も八月末日で終り、九月一日（たしかその日は土曜日であった）午前中、お礼のため東京出張所に出頭する予定で、早朝関宿の下宿先を引き払い、途中最後の挨拶に工場を迂回したところ、折悪しくこの日は朝来荒れ模様で、時折劇しい雨が堤防の下から吹き上げ、同所に辿り着くまでに下半身がずぶ濡れになってしまった。工場の厚意でズボンを乾かしている間に天候も恢復し、東武線杉戸駅に着いたのが十一時すぎ。駅の待合室で上り列車の来るのを待っていた時、正午寸前あの大地震。全く目を覆わせる惨状は、三十有余年後の今日、猶まざまざ脳裏に残っている。万難を排してその夕方、辛じて荒川の左岸縁まで進み出たが、その頃東京の旧市街は勿論のこと、遠く横浜まで見渡す限り一面の火の海。その夜は罹災者と一緒に堤塘で一夜を明かしたが、元々この近辺の地理には暗く、それより困ったことには相当まともだった実習手当を懐にしていたものの、沿道の商家は営業どころではなく、喰べ物を売ってくれる店もない有様なので、本意ないことではあったが、東京出張所に顔出しすることを断念、機関車の上に乗ったり、客車の窓から割り込むような混乱裡を、遠く信越線を廻って四、五日後郷里木曾に帰った。五霞村出發後、一時井上の生死不明を伝えられ、そのためあのような非常の場合、私一人のため中川所長や、

真田部長その他に余計の心配をおかけして申訳のないことであつた。願れば中川さん、春木さん、池田さん既に亡く、今また真田先生を失つて洵に淋しい限り、謹んで哀悼の意を表する次第である。

私は翌春京大を卒業、前述の実習の縁もあって内務省に奉職、大阪土木出張所に勤務することになったが、それは奇しくも、真田先生が同所長に東京から榮転された翌月であつた。真田所長については、着任されて間もなく、世間一般に先んじて『メートル法』を実施され、折柄手がけていた吉野川左支、川田橋の設計に當って、丸鋼の目方や、木材の寸法等、一々尺貫の対照に閉口したこと、往年先生が淀川御在職時代、木津川、宇治川背割堤に記念として植えられた松並木に倣い、先生の御功績を永く伝える意味で、三川合流工事の結果、下流に延長された新背割堤に、故谷口主任の指示で松の苗木を植え込み、それが現在立派に育ち上っていることなど、まだ数々の追憶があるが、この辺で重ねて先生の御冥福をお祈りして筆を擱くことにしたい。

故人 愛 惜

本 莊 秀 一

秀という名前を持って居る土木家は少ないので、政人の井

真田先輩を悼む

長久保俊夫

生別已吞声 死別常惻惻 　　と往時唐の詩人杜甫が夢李白と題して歌って居るが、此度の真田先輩の御逝去に際しては洵に惻惻として深く心打たれる思　がし、又その温容は今に眼前に彷彿としている。

先輩には直接の部下として仕えたことはないが、旧交会その他の会合でお目にかかる機会は何度もあつて、その都度後輩を前にして諄々として教え説いて居られた。如何にも慈父と云つた感じの温容は殊に忘れ難い。

それにつけても昭和二十四年の夏、当時はまだ広島にお住いだったと思うが、偶々他の所用で大阪にお見えになったことがあつて、早速箕面の宿に伺い、更に翌日は淀川を隈なく御案内申上げたことが特に印象深く思出される。その際現地で数々の有益な教えを頂いたのであつたが、「自分も何時死ぬか分らぬ故、生きているうちに何でも好く聴いておいて呉れよ」と親切に申された言の尾について、厚かましくも「貴重な長年の蘊蓄を、是非とも書物にして後輩の爲に残しておいて頂きたい」と強いてお願い申上げた次第だったが、後日その願いを叶えて下さつた許りでなく、爾來約十年、生來

上秀二さんの次は真田さんが何んとなく懐しく感じて居つたのに今や亡し。東京出張所の利根川第三期の大先輩として河川の仕事を指導して居られる時初めてお目にかかつてから三十七年の年月は過ぎて居るが、その間真田さんとの繋りの追憶の糸を操つてみよう。今から二十五年程前東京出張所長時代、余り丈夫ではない様だったが、常に清潔で姿勢がよかつたことが印象に残っている。富士川の三川合流に立つて懇々と水制工事を説かれた事。満州国創立に真田所長が派遣人選を担当され、所長室がその本部となり、自分は真田さんの面前で最後の応諾をした時、頗笑まれて『本莊君行つてくれるか』と嬉しそうな、又気の毒そうな顔をされた事、広島の上原から大阪迄の車中疲れも見せずよく語られ、進駐軍に貸してあつた大森の自宅へ近日引越すんだと喜んで居られた事、奥さんが亡くなられた直後大森の御宅を訪ねた時、奥座敷の陽当りのよい縁側に机に向つて書き物をせられ居つた心持ち淋しそうな姿、「御丈夫ですね」と申し上げた時、微笑し乍ら「僕は怠けものでね、悪い時は直ぐ寝てしまふんだよ」と簡単に片附けられた一言は、大先輩の養生訓として自分が風邪を引いて寝込んだ時は常に思ひ出す言葉である。齒は余り丈夫でなかった様で、時折口をもぐもぐされて、小さい眼鏡の奥からジツト此方を見て居られる真田さんの偲影は永久に技術指導者の顔として消えないだろう。

蒲柳の質にも拘らず、摂制之れ努められて克く米寿を完うされ、此の間終始 富貴何若草頭露 の概を抱かれつつ技術に専念され、河川の神様として身を終えられた一生は、人として又技術者として真に我々が渴仰してやまない次第である。時偶々北上の途次常磐線の車中にあり、風塵漠々として窓外の野を蔽い、転た追憶の念を深からしめて居る。

(三月二十四日記)

真田さんの思い出

伊 藤 信

真田さんが急逝されて、再び温容に接することができなくなつたことは私どもにとつてまことに心淋しい限りである。

私が真田さんに初めてお会いしたのは、私が学校を出て間もなく、五十里堰堤に勤務していた頃のこと、真田さんが大阪土木出張所長から東京土木出張所長に榮転されて初めて巡視に來られた時のことである。

當時私は五十里堰堤の調査を担当していたので、池田主任と一緒に現場を案内して、あれこれと調査の状況を説明した。

ところが真田さんは余り関心がなかつたのか一向に聞こうともせず、六ヶ敷しい顔をしてそっぽを向いている。

この時、これは大変な親父であると思つた。

後で調査資料を見せろと云われたので、整理した資料を恐る恐る差出すと、たまたま表紙に伊藤工手と書いてあつたのが目に止り、とたんに君等がこんなことをするのはまだ早いと一喝され、恐縮して引下がったことを覚えてゐる。こんなことからか、お通夜の席で旧知の人々から真田さんに一番叱られたのは君だろうと云われた。

弁解するつもりはないが、設計書の書き方が悪いとか、図面のたたみ方が悪いとか、間接には色々とお叱りをいただいた様だが、内務工手が所長に接する機会は殆んどなかつたのでその後直接叱られた記憶は余りない。とは云うてもその當時私共にとって真田さんと云えば確かに怖い所長さんであつた。

而し退官されてからは、却つてお目にかかる機会も多くなり、又親しくお話を伺うことも出来たが、いつも慈父の様な態度で温く私共をお導き下さつた。

真田さんの業績に就いて今更私などから申上げるまでもないことですが、真田さんが在官中最も苦心されたことは、何んと云うても五十里堰堤の中止問題であつたと思います。五十里堰堤の施工に就いては池田主任技師を欧米各国に派遣して新技術の導入を図り、或はケーブル、クレーン等當時としては斬新な機械類を外国から購入して、その万全を期したの

真田さんを偲ぶ

であるが、掘削の中途に於いて湧水の事故に遭遇し、その原因の検討及びその他の状況から基礎岩盤に欠陥ありと推定され、堰堤の安全を確保し難いと云うことで、一部に多少の異論がないではなかったが、堰堤工事は不幸にして一時中止の已むなきに至ったものである。

この工事は着工以来既に数年を経過し、一部の用地買収は終り、掘削も相当に進捗して多額の工費を支出していたことでもあるし、又堰堤の中止によって鬼怒川改修計画に重大な齟齬を来たすことにもなるので、その前後処理に就いては責任者として極めて頭の痛かったことでありましょう。

地元栃木県でも色々と批判があつて、所長自ら議会に出席して説明了解を求めると云うこともあつた。

今から考えて見ると、全く私どもの技術が未熟であつたことに帰因するもので、その責任を痛感するものであるが、昔を思い起して、真田さんに非常に御心配をおかけしたものとまことに申し訳ないことと思つてゐる。

この五十里堰堤も今や建設省の手で再び着工され、立派に竣功したことは真田さんにとつても何によりも喜びであつたに違いない。

今は亡き真田さんの昔を偲び御冥福を祈るものである。

立 神 弘 洋

茲一、二年の間に立派な先輩が次々と逝去されて実に物淋しい。河川工学の神様であつた真田さんの御逝去は、丁度自分分が外遊中であつただけに、ほんとうに『突然』の感じが深く、親を亡くしたようである。聞けば米寿のお祝いがあつた直後とかで、御本人も九十の齡は当然のこととお考えになつたように思われる。よくよく惜しい人を亡くしたものである。

明治中葉から大正、昭和年間を通じて我が国の河川工事に携つたもので、直接間接におそらく真田さんの世話にならなものは、まづもつて無いものと考えられる。しかも、大抵の方は少くとも一度や二度は叱られたのではないだろうか。いわゆるお叱教である。真田さんの現場仕事への態度は相手が県工事だろうが、内務省工事だろうがお構いなしである。県の道路工夫が突然背の高い白髪の老人に叱られて啞然として居つたようなことは時々あつた。それだけに土木工事一般に対して非常に真剣で些細なことでも少しも許しておかれない方であつた。真田さんが東京土木出張所長をやめられたのは昭和九年の夏であつたから、丁度今の河川局長の山本三郎

さんあたりが、現職最後のいわゆる『お叱教』を受けられた方ではないだろうか。

我が国古来から伝わった河川の護岸水制工法を体系づけられたのは実に真田さんであって、杵の組み方から杭の間隔、方向まで詳細に亘って現地指導をうけたものであって、一言一言のお小言が、ほんとうに身に沁みてよい勉強になった。

晩年の真田さんは、ほんとうに人が変わったようにおっとり静かな方になられ、専ら明治土木史の編纂とか、さらに沖野さん等の大先輩への事蹟をお調べになって居られた。従ってこの方面への真田さんの御功績は、さらに道路河川工事に尽されたものに立派な花をお添えになった。今全国で土木事業が時代の脚光を浴びて河川に、道路に実施されて居るが、真田さんの遺訓がどんな型で發揮される事であろうか、高等数学に進む土木技術者は年々多くなるが、ほんとうの現場技術の指導に当る者は、年々減少して居るのではあるまいか。

真田さんに代って青年技術者を心から愛し、現場指導に当る真の土木技術者が一人でも多く現われてほしい。今までは何か現場で問題が起ると、谷口さん、辰馬さん、金森さん、そして真田さんと相談先が沢山おられた。しかし、今はこれらの立派な人が居なくなられ誠に跡淋しい思いである。英雄待望論ではないが、第二、第三の真田さん、辰馬さん、谷口さん、金森さんが出て来られる事を心から祈るものである。

真田秀吉博士を偲ぶ

米 田 正 文

土木界の大先輩真田秀吉博士が逝去されたことは、何と云っても現在の土木界にとって非常なショックで残念この上もない。博士は現在の吾日本の土木技術の創始者である。明治初年和蘭の工師が来朝して西洋土木技術を伝えて初めて吾国の土木技術は科学化されたと云っていいのであるが、それを直ちに受けついだのは沖野忠雄博士を中心として明治初期の第一技術陣であったが、その次を受けついで、今日の建設省関係の技術体制を整備したのは真田博士を中心とする第二技術陣であった。特に河川技術の水準を今日の体制にまで発展させて来たのは真田博士の功勞であると云って過言でないと思う。

博士は常に技術の進歩向上のために努力され、名利を求めず黙々と技術の研鑽に一身を折込まれたのであった。

博士は技術について常に高い見識を持ち、その研究心は厳しかった。荒川改修工事では内務省に入った計りの私を東京土木出張所長室に呼んで設計の詳細について指導して下さったり、又は栃木県の晩梨橋工事ではコンクリート骨材について細かい指導をして下さったり、思出は尽きない。私の満州

国に居た頃来満されて『最近の土木情勢』について講演をされたことがあったが、河川砂防や道路についての技術に関する自分の考案になるものばかりの話であつたので、満州国の若い技師連中はそれにあきたらず、もう少し土木出張所長らしい話が聞きたいと不平を言つた者もある位だが、それだけに技術に対してひたむきであつた。行政面に関係せず、ただただ技術の向上にのみ一身を捧げたと言つていい。そのことに關しては国宝的であつた。人間文化財と云う言葉があるが土木界から之を選ぶとすれば、びつたりするのは真田秀吉博士である。日本の今後の土木界の進歩向上のために是非第二の真田田博士、第三の真田博士を育てたいものと思う。

真田先生の憶い出

宮田隆一郎

真田先生も遂に逝かれてしまわれた。

私が大学を出て内務省東京土木出張所にお世話になってから足掛三二年の間随分お世話になった。その間に専門の土木工学の話から昔話もよく聞かされた。記憶力の確かなことは驚くばかりで、数字など実によく覚えられて居られた。

あの柔和なお顔に自分の話しが面白くなると、独特の笑顔を立てられて、とつとつと話される様子は私には忘れられな

い。でも、若い時分はよく叱られたものだ。年をとられてからすっかり好々爺になられ叱らなくなった。

私が広島に居た時は、まだ東京よりの疎開で三原市に居られた。市の名譽市民として市のために尽されて居られ、三原城の石垣など重要記念物の指定に骨折られた。

私もよくお訪ねした。頼山陽の書の研究では第一人者で、またよく山陽の故事に詳しく研究もされて居られた。一度は銘酒『酔心』の主人が山陽の書を蒐められて居られたので、私を誘つて山陽の数々の軸を見せて頂いた。これ等の書や画を収めてある建物が立派であつたが、先生はこれ等の貴重な遺品を焼いたり盗られたりすることを心配して、酔心の主人にすすめて建てさせられたと云う話であつた。

山陽の故事来歴を実に詳しく調べられたが、それについて山陽の叔父が昔代官をやつて居た庄原地方の『運甕居』を訪れたいと云うので、一日三好市より庄原の町の方を案内いたした事がある。庄原の町役場で町長さんの先達で案内して貰つたが、地元の町長さんでさえ、この叔父の歴史や治蹟について何にも知らない有様であつた。後年東京に出られてから逢つて話の出た折に「広島地方に永く居つたがついぞ心にかげながら行く機会のなかつた運甕の故地を始めて訪ねることが出来て嬉しかった」と必ず云つて居られた。

三原市は先生の故郷であられたが、晩年はこの方面には知

己朋輩も少く稀にしか遭えないので淋しがっておられ、東京に行き度いと云って居られたが、私が広島を去って一月経たない内に東京に出られた。"東京には友達も後輩も多くさん居り淋しくない"とよく云われたが、ホントに東京に出られてよかったと思う。

真田先生の計報に接して私は嘘でないかと思った。

その日は久し振りで家内と一緒に訪ねて午後の五時頃迄炬燵に入つてよもやまの話をして居ったのである。あれから数時間後に先生はなくなられて了われたのです。全く夢の様に思われてならない。先生の好きな広島が、きは、丁度私が前日広島より帰った折に提げて来たのに、でもあの晩は好きなかきの味噌汁を二杯おかわりしたと家人より聞いて、悲しみの中にはんとに嬉しく思った。

真田博士をお慕いして

山 本 三 郎

私が真田博士に最初にお目にかかったのは昭和八年四月であつた。内務本省からの添書を持って大手町の内務省東京土木出張所に出頭し、採用の辞令をいただいたわけである。文書係長(川俣さんであつたと思う)の案内で当時ブラックづくりにあつた所長に入って真田所長から辞令をいただき、目

出度く役人の第一歩をふみ出したのである。その時の博士のお言葉は今でも忘れられない。「学校では一応土木学を習つたらうが、今から二、三年は完全に見習だ。その積りで勉強しなさい」と。後から考えて見ると全くその通りで、おさとしの後段は果して実行したかどうか誠に怪しいものだが、学校を出たばかりの時の現場は教えられることばかりであり、又その時でないと何でも聞いたり見たりすることが出来なくなつて機会を逸して了うということもお言葉通り体験した次第である。

昭和九年の五月東京の所長を最後に官界を引退されたのであるが、利根川の改修問題や、利根川の大洪水の際など、つねに熱心に後輩を指導されていたので直接間接にお話をお伺いする機会が多かつた。昭和十年九月利根川に改修以来の大洪水があつて小貝川筋で破壊した。当時の辰馬東京所長は利根川関係の大先輩の参集を願つて今後の処置についての意見をきかれた。その時出席されたのは九井九介、中川吉造、前川貫一、真田秀吉、坂本助太郎、片山貞松、金古久次、福田次吉の諸先輩であつたと記憶している。当時学校を出たばかりの私にとっては利根川の生きた歴史をおききすることが出来、各先輩の云われることは何れも貴重な体験をもとにされたものであり、然も御自分達のやられた仕事に対する反省などをまともに語られる姿は内務省直轄工事の本髄を示すもの

として感銘に残るものであった。

真田先生と私などでは先生の先生或はも一つの「先生」がつけ加わる位の間隔があるが、博士の直轄工事遂行の精神や技術は当時の各現場に浸みわたっており、今に至るも尚それが太い血管となっている。先生の名著『土工』『日本水制工論』はその代表的名著であり、又先生は治水工事に機械化施工を導入された先覚者と拝承しておる。新しい機械を使うときの心構え等一々卓見として御自身からも、又先生の弟子である先輩諸公からも拝聴いたした次第である。

終戦後先生は広島の方へ疎開しておられたので、お目にかかる機会が少なかったが、最近では東京の御本居にお住いになられ、旧交会の会合には必ずお顔を出され、特に沖野博士の伝記の著述や、内務省土木の諸先輩の行跡、明治以来の治水工事の歴史等の記述に八十を越えるお年にも拘らず実に丹念に筆をとっておられたのは実に敬服にたえないところであった。

我々後輩は先生が御壮健の間に貴い御体験をすこしでも多くお聞きしておきたいものとお心に心しておった。又私は二年前前に当時の利根川の上流の所長小西君と久し振りに利根川に先生のお伴をして実地にお話をおききしたいとおもい、先生にも御了解をいただいておったが、遂にそれを果すことなくおなくなりになったことは誠に残念の極みである。

我国直轄治水事業の元祖であられる真田博士を失って、私共後輩はまことにさびしき極みである。技術に専念された強き尊い先生の精神をついで、相共に国土建設に邁進することをお誓いしたい気持ちで一杯である。

真田秀吉先生を偲ぶ

三原市長 平井昌蔵

我三原市の生んだ偉材、花井卓蔵、高楠順次郎両先生と相並んで真田秀吉先生の令名は夙に聞いて居りましたが、内務省時代大東京都の都市計画を樹てられた御功績は実に永久に残る偉業で、先生の生魂を傾けられた大事業であつたと思うのであります。

御退官後御郷里三原市に於いて悠々自適の生活の中に当市最高の顧問として御般の御指導を賜わり、就中古蹟三原城が戦国の勇将小早川隆景公の築城による一つの特徴を持つ名城である事を指摘せられ、今日重要文化財に指定され、三原市民をして三原城趾に対して新たな関心と之れを後生に伝えねばならぬと言う事になりました事も、一偏に先生の御教示御尽力によるものであります。

私は亡父が御親交を辱くして居りました三原市御在住の方々を毎年思い出深い昔の天長節（十一月三日）拙宅に御足労

相煩わし、新穀を炊いて差上げ、昔語りに楽しい一日を過して頂くのが二十数年来の年中行事であります。先生も其お一人で（現在では竹村秀三郎、宇都宮泰蔵両先生御健在）ありまして、往時を偲んでの昔話に花を咲かされまして思出誠に懐しく、今更ながら感慨無量でございます。其時皆様方の寄書を記念として頂き、之を表装して永く我家の家宝として伝えたく諸先生の御仁徳を敬慕して居りますが。

三山先生より賜りましたもの

『老余豈諺口喉福

祇愛故山友朋情』

『菊花香辺嘗新穀

依例君情与花芳』

『堪想先君余徳在

興望与菊一郷馨』

三山

往時を追憶して敬慕の念に堪えません。謹んで先生の御冥福をお祈り致します。

真田秀吉先生を偲びて

西日本復興建設株式会社 上 升 主 斗

真田先生に始めて御会いしたのは、昭和二十一年九月二十

八日内務省中国四国土木出張所で社団法人復興建設技術協会中国支部設立について御相談に東京から伺った時である。同出張所長末松栄氏、広島鉄道局施設部長江藤智氏等と相詢り先生に御就任方御願ひした処、心よく御承諾下さいました。当時既に七十三歳であられた先生は、実に温厚にして気品ある風格を備えられ矍鑠としておられました。

その後、社団法人中国四国建設機械運営協会会長にも就任されました。其の期間は次の通りであります。

社団法人復興建設技術協会中国支部 支部長

自昭和二十一年十二月一日

至 三十二年五月二日

（註・この協会は、終戦直後主として外地より引揚げた多くの離職技術者を救済する為之が活用、技術の相談指導、調査、測量、設計等の事業をなすことを目的として創立された公共的機関にして、現在全国的に組織を有する最大のコンサルタントとして発展している。）

社団法人中国四国建設機械運営協会 会長

自昭和二十四年九月十九日

至 三十五年一月二十日 御逝去迄

（註・この協会は、昭和二十四年五月建設省に「建設機械運営協議会」地方には同じく「地方協議会」が出来た主旨に沿ひ創立された公共的機関で、其の目的は当時米軍の進駐により各種重機械が持ちこまれ盛んに機械力が利用されている状況に鑑み、我が国でも早急に機械化の普及並びに技術員の養

成を図るため之を主眼とし実際に作業をするにある。現在も存続し業績を挙げている。

私は昭和二十三年二月より同三十二年五月迄九カ年間副支部長として、又二十四年九月より二十九年九月迄五カ年間理事長として両協会にて長い間直接御指導をうけ御仕えしました。

先生は戦時中より御郷里の三原市に疎開され、その後ずっと実に立派な旧家の離れの二階屋に起居して居られました。が御伺いする度にいつも坐して著作か読書、其の不撓不屈旺盛なる気概には驚き入りました。

先生は、如何なる時でも私共部下を叱咤されたことは一度もなく、前の該博なる智識と豊富なる経験を以って談笑の内に、創業日尚浅き時代によく御指導を賜わり、私には大先生であると共に慈父の感がありました。

先生は歴史に明るく、特に頼山陽の研究は衆知の通りにて一日中御話を伺っても尽きることなき程でした。山陽の生地を碑を建てられたのも先生であります。

又、漢詩を作られ、書をよくされたが、之が六十歳を過ぎてからの御勉強とは凡人の到底企て及ぶ処ではありません。私共従事員は先生の自作に係る沢山の書を戴いて居りますが、今日ではこれが無上の思い出の遺品となりました。

先生に長寿の秘訣を御聞きしましたところ、"君、よい酒

を毎晩盃に二杯ずつ飲み給え"との御教えでした。深飲みを戒められたものと存じます。

先生の御壮健に反し御令閨はお弱く、床に就いて居られる方が多い位でありましたが、常によく御労わられ、鴛鴦の契とはこのことかと傍から見ると目も美しいものでありました。そして、ついに三十年十二月十九日先生は御夫人と共に三原市を後に東京の本宅に移されましたが、その時駅頭には知人や近隣の沢山の見送りがあり、御夫人は最後とも思われる御別れに惜別の情まことにこまやかにて、私迄目頭の温まるを禁ずることが出来なかった次第であります。

東京に帰られてからも常に病床にあられ、三十二年五月二十九日不帰の客となりました。七十八歳と御聞きしています。先生の御落胆誠に御気毒に存じました。

我が国土建設の技術者として、又人徳の士としての大偉人も米寿の御祝を目前にして終に今年一月二十日忽焉として御逝去になられました。邦家のため惜しみても余りあるところであります。多くの名著書は永遠に御輩を導かれることでありましょう。

真田先生を追憶して

復興建設技術協会中国四国支部長

松村恭二

芥川暉雄様より御郷里に御住い当時の真田先生について、思い出を書いて欲しいとの御申出がありましたので、拙文で恐縮に存じますが、私が崇拝する先生に就いて思い出の一端を書きます。

私が初めて先生にお目にかかったのは、私共が終戦により大陸から引揚げて復興建設技術協会中国支部を開設する為にその準備を始めて居った昭和二十一年十一月内務省中国四国土木出張所末松所長の御部屋でありました。先生は戦争中より疎開され、御郷里三原市の豪壮な真田本家の別棟に奥様と御二人で御住いになり、昭和三十年東京へ御転居になる迄約九年間私共の支部長として御指導を賜ったのでありますが、その間先生から受けた御教示の思い出が数々御座居ます。

既にその当時古稀を過ぎた御高齡にも不拘、矍鑠として広島県内は勿論、山陰に四国に私が御伴して御出向を煩し、協会の事業について御説明を賜り、仕事の発註等についても、種々御骨折を戴きました。御蔭様にて協会の業績も順調に経過して今日あることを得ましたことを、中国四国支部職員一同感謝して居る次第で御ざいます。

先生から名著『日本水制工法論』等を引用して、種々我國の建設技術に関する御高設を拝聴したのでありますが、結論として「事象を究明するには歴史的事実あるいは現在ここにある事実を正確に観察把握することが大切だよ」と、おっし

やる先生の御言葉は、測量、調査、及設計を主とする業務の私共にとってこよなき御教訓として忘れる事が出来ません。

又、昭和二十四年末松地建局長の御高配に依り米軍払下げのグレーダー、ブルドーザー等、近代的建設機械化普及の為中国四国建設機械運営協会を設立するに当り、会長に御就任方を御願いしました際、快諾下され、その時既に建設機械化の今日の進展実現を予言して居られたので御ざいます。

先生は三原市の仮偶に於いては何時も机の前に端坐され悠々自適漢詩をつくって居られ、御伺いする度によく漢詩の御話を承りました。特に頼山陽の書について御造詣が深かった様で御ざいます。

私が先生の直筆を御願い致しました処、早速左記の様な自作を揮毫して戴き、表装して床間に懸け先生を偲んで居る次第で御座います。

不慕功名不厭貧 胸中常貯十分春
一杯茶味吾忘老 迎得八旬閑適民

三山

先生の御伴をして上京する際、車中にて沿線の城趾即ち広島城、三原城、福山城等々と築城した当時の藩主、工法等について詳細に次から次へと拝聴し、先生の御研究心と御記憶力の明確なのに一驚した事も御座居ます。

昨年の春東京大森の御宅に御伺いしました節、先生は私が

かつて満鉄に勤務して居た関係から、鉄道に関するものとして
広島の藩主浅野長勲公の書を頂戴致しました。之又家宝と
して大切に保管致して居ります。

汽車中所見

坤山勲

鉄路超超望壯哉

一山飛去一河來

窓前恰見橫岡美

指点忙忙捲又販

汲めども思い出はつきません。眼をつむると端正な、そして
温容な先生が髭髯として浮んで参ります。

その尊い御姿は永遠に私共の心の中から去ることはないで
しょう。

真田さんのことども

三原市小林医院長 小林 蓮

真田さんは非常に頭の良い人であった。昨年初夏のころ、
三原へ帰省されたときのことである。『談風会』である会員
が君の尽力によって史跡に指定された三原城趾のことにつき
質問した。これに対し、小早川隆景築城当時の歴史、君が幻
時の頃の城廓のこと、藩校『明善堂』のことなど、今は煙滅
して跡方もなきものの現在の位置等、微に入り細に入り説明
されたのには、居並ぶもの、この老人にしてこの記憶力あり
ことごとく舌を巻いた。

私が君の知遇を得たのは終戦後、君が三原へ疎開されてか
ら以後である。

あるとき、小宅に於いて、故川口国次郎さんやこれも故人
になられた渡辺哲信さん等と画箋紙の半折に山水の合作をし
た。そのとき、真田さんは『三山（真田さんの雅号）歎じて
曰く、人は皆一芸あれど我独那志』とこれに賛をせられた。

その頃は書も詩もお上手でなかったらしい。書道に精進し
漢詩を熱心にやられて一かどの書家となり、詩人となられた
のは、それ以後のことである。いかに頭の良い稀有の努力家
であったことがこの一事にても分ると思う。

謡曲も三原では謡われたのを聴いたことはないが、非常に
おすきであったようだ。謡会のある毎に君の顔を見ないこと
はなかった。

茶にも趣味を持たれ、茶会によく列席されているのを見た。
君はお若いときから頼山陽の研究家として一家をなしてお
られたらしい。山陽の落款の、山の第一画が点状になったの
は山陽四十八歳以後である。それ以前のものには、点状にな
っているものは一つもないと教えられた。山陽鑑定上重要な
ことと思われる。

君は郷土愛の念厚く老軀を厭わずこまめに歩きまわり、頼
家発祥の地に礎を建てたり、糸崎八幡神社前には梁川星巖の
双鷺洲の詩碑を建立されたり、三原市役所内に『三原保勝会』

を創設して市を督励し、名所旧蹟を顕彰されたと枚挙にいとまないのである。

此等功績に対し、三原市は確か『功勞賞』とかを以って酬いたと記憶している。私はそのとき、君を最初の『名誉市民』として遇するのが適當ではないかと思った。

八十歳を過ぎて東京、三原間を平然と往復せられた位お達者であつた最近、君の手により編纂せられた『土木史と沖野博士伝』を拜見するに、二百五十頁にもわたる著書である。

大変な根気と努力は勿論、緻密なる頭脳と透徹せる記憶力の保持者にして、はじめてこの著はなつたのであらう。これが米寿に近き人の業績であるから驚いたものである。

かくの如く神身共に健全にして老衰現象らしきものを認めず、血圧も低く、少し神経痛の気味はあるが、まだ医者から貰つた持薬は一度ものまないと私に語られたことがある。

本年米寿を祝われた。いわゆる功成り名遂げ、健康にも恵まれ而も趣味豊かにして朝夕詩書に親しみ、長生の甲斐ある人生であると、私の知れるかぎり、めつたにみない幸福なる晩年の持主であると常々思つていた。白寿の祝、疑いなしと信じていたのに青天の霹靂のごと御急逝をきき、三原市民としては郷土出身の代表的先輩を失い、巨星地に落つる感深く、『談風会』としては終戦以来帰東される迄毎月の例会に、一度として君が欠席されしことを聞かず、会のリーダー格として後

輩からは慈父の如く親しまれ、御指導を受けていたのに、今後再び温容に接し、談風をきく由もなきを悲しみ哀惜の情禁ずる能はず、ひとえに君の御冥福を祈る次第である。

懇切な心づかい

三原市三原図書館長 藤原 覚 一

真田先生とは昭和二十四年私がこちらへ移つてからずっと御交際をして頂いた。おつきあいと云つては御無礼かもしれないので全く御指導を仰いだことであつた。昭和二十八年、同三十年に三原図書館へ贈られた書物の自作七絶は先生を記念する好個の遺墨として永く伝わることでしよう。

日昇東海旭光新

独立迎來第一春

願与梅花冒冰雪

凜立振起旧精神

癸巳元旦 三山

滾々鳴琴嶽下流

原泉日夜不姑休

何時洗尽塵寰惡

注自東瀛及五洲

乙未宸題泉 三山

先生はさすがに学者の方だけあつて図書館には格別の関心をよせられ、何くれとなくお世話頂いたことは忘れることができない。館内で部屋の表示板の下書を書いていた時、「ラベートルーのAをEとよく間違えるから注意しなさいよ」と

か給仕がお茶を入れて「お番茶ですがどうぞ」と差し上げた
ら「お番茶ですが」は宜しいと小娘を褒めて嬉しそうに受け
られた頗笑ましいひと時もあった。こんなささいなことに
も懇切な御注意が行届いてお人柄がなつかしくてならない。
いよいよ東京へたれることになった時など真田家に残って
いた書物など沢山寄贈して頂いたことである。今にして思
えばすべて先生の形見となつてしまつてひとしお想い出
が深い。

図書館が狭くなったので新しく新築しなければなら
ないと私を連れて地所見に行つたり、御自分で設計図を
スケッチして下さったり、有難い御援助をして下さつた。
新建築はいまだに着手されない今日、最早先生の御援
助を永久にお受けすることができなくなつたかと思へば
寂然として虚空に坐する感がある。せめて先生御存
命中に新図書館の偉容を見て頂くことができたらど
んなに喜んで頂けたらうと無念である。杳として光
芒とわに消ゆ、噫。

真田三山翁を憶ふ

三原談風会 原 田 基

今年正月十五日の夕暮であつた。荆妻が酔心山根花
酔庵のお茶会に招かれて帰宅し、その日の庵主の心
尽しの茶席の飾りつけなど興面白く語つたあと、
在京の真田三山翁が明十六

日米寿の賀宴を催されるとのお話を聞いたと。

何んとお目出度いことかと羨望もし、遙かに翁の
長寿と健康を心から祝福申上げていた。

然るに数日後のある朝のことである、年甲斐も
なく近來朝寝坊になつた私は不行儀にも寢床の中
で新聞を披見した、とたん目に入つたのは真田秀吉
と横に太い黒線が引かれているのを見出し、仰天し
思わずはね起きた。自分の目を疑つた、やっぱり真
実である。家人に声をあげた。即刻同友に電話し
た、間もなくやつて来た同友も疑問の声を發し繰り返
しその欄に見入つて歎息し、互に翁の長寿と大往生に
瞑目哀悼の意を表した次第である。

翁が曾つて中央官界学会に於いての専門的功績は
今更余輩の申述べる必要はあるまい。

三山翁が大戦中郷里三原に疎開されて以来、郷土の
古典文化につくされた功績は亦多大なものがある。

翁は特に山陽頼家の研究には自惚的に一入の熱心さ
であつた。曰うまでもなく頼家の発祥地が三原市即ち
翁の郷土であるという点と翁の郷土愛の然らしめて
点にあると思惟せられる。

兎も角も三山氏は文人として専門学者外の趣味にも
富んでいた素質によるものである。

翁は資性端麗長軀にして、歩む姿は恰も丹鳥の鶴の
様に清

楚そのもので、語れば率直、天真爛漫飾り気なく邪気なく、その温容に接することが出来た。三原談風会が翁の発意によって生れたと曰つても過言ではあるまい。

三山翁は在郷中度々「おるか」といつて拙宅を訪れた。その日はいつも終日を快く過し得たことを追憶し今も感謝している。

先生の文人趣味について思い起す事例はあまりに多いが、その二、三の挿話を記して翁を偲ぶ一端としたい。

先年余が不図山陽書林谷刀の仙媒を入手し、お目にかけて際、翁推賞おく能わず、「これは正に天下の名品だぞ、こんなものを手放す奴があったのかい」とその由来を丹念に調べて回報されたほど頼家山陽讚美家でもあった。又ある時、郷土名物のヤッサ踊の自作詩を画箋紙に書いてこれに踊の絵をかけたの注文には、画家ならぬ私、いささか当惑したもので、出来不出来はともかく、勇気を揮って素人画をかい送ったことがある。恐らく翁は苦笑して見られたことと思うがこれも翁の郷土愛の片鱗だと私は信じている。

昨年春のこと、同氏本家世嗣の御婚儀に帰郷された際態々来訪された。その日余が王一廷画く楊柳に燕の幅をかけていたら一見鉄斎画と早合点されたらしく「ほんまかいなア」の一言、勿論私が鉄斎先生の礼讃者であるので、ハハアと氣付き、落款をと一語発したら「ふふん」と一笑合点された。こ

れらは全く翁の率直さを物語るものであろう。

斯様にして翁の思い出は次から次へと走馬燈の様に私の脳裏をかけめぐる。

ああ惜しい人を失った。我が意を得た大先輩をなくしたことを悲しむ。天命の然らしむる処いたしかたもあるまい。

香をのこし散るや巨木の梅の花

駄句を捧げ謹んで先生の御冥福を御祈りして擱筆する。

昭和庚子春孟廿又五日

老博士の漢詩に就いて

日本南画鑑賞会主幹 西村 南 岳

老博士は漢詩に就いて御自身が次の様なことを申して居られます。

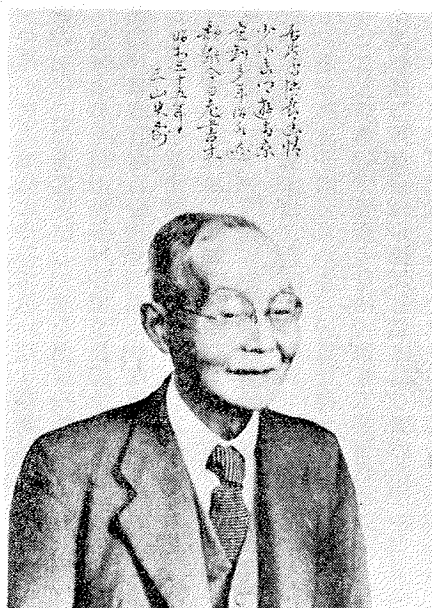
「書画鑑賞の会合をする毎に、詩を見る機会が多く、初めは読み下しが困難であったが、詩人の友があつて、スラスラ読み下すのに感心して、大分勉強もした。

偶々昭和二十年郷里に疎開してより、昔の作詩書を引き出して、盲目滅法の手探りで字を並べて居ったが、その内詩の先生に逢うようになり、遂に作詩を覚え、下手ながら毎月継続して作つて添作を仰ぐに至った。

詩とは心に思う所を詞に綴つて唱詠するものを云う。畢

竟、心の声である、韻ありて歌詠するものだから平仄則ち調子に合わせねばならぬ。

漢字には一々平と仄との別あり、これを巧みに組合せ韻律に合わせねばならぬ。而かも雅趣あるを貴び、散文的ではない



居常守拙養幽情
少小去郷遊兩京
空剩多年治水迹
頽齡今日老書生
昭和三十五年

三山米寿

居は常に拙を守つて幽想を養ひ、少小にして郷を去つて兩京に遊ぶ。空しく剩す多年治水の迹。

頽齡の今日、老書生。
昭和三十五年

三山(老博士雅号) 米寿(八十八歳)

かぬ、僅々五言七言の四句で二十字、二十八字だから意を全部云い尽せず、言外の余韻を味わうので面白味がある。この風韻ある詩はなかなか熟練を要す。和歌も俳句も皆然りであろう。

作詩に当りては嘔心の苦を伴うも、出来た時の快味はまた格別で、所謂吟安の味は本人のみが知る愉快さである。古来詩を有聲の画と云い、画を無聲の詩と云い、詩画共有の風味がある。詩の平仄の規則は極めて容明であるから、志ある人はドシドシ試みては如何。字の平仄は漢字典にあるから直ぐ分る。

書画も詩も浮世離れての遊戲で、養老法の随一であるとも云い、予も信じておる。……」

以上が老博士の漢詩論でありまして、不言実行の老博士は七十四歳の老齡から作詩を着々と初められた。

尚それに就て老博士は自ら詩稿の冒頭に、

「二十一年(七十四歳)三原疎開頃より作詩を独学にて初め二十三年(七十六歳)八月より虎南吟社に入り、素齊先生、呂山先生の批正を受け、二十四年(七十七歳)三月、黒潮吟社に入り、藍川先生に正を受く。七十六歳以前は別帖にあり極めて拙作のみなり、師なし、批正なし、暗中摸索也」と、明記してある。

果してその通りで、昭和二十二年十二月二十六日より昭和

三十五年一月十三日までに、六百四十四首の詩作が詩稿に記されて居る。その一詩ずつ素齊、呂山、藍川の三先生の批正が丁寧な朱点してある。然もその一詩毎に番号と作詩の年月日と更に何某何氏へ此詩を書き送ったと、まで一々明細に書留めてあるなど、その綿密なこと流石は老博士なる哉と敬嘆の外はありません。

その何れの詩も老博士惨憺たる苦心の結晶であります、詩稿全部の詩と披露することは不可能でありますので、六百四十四首中より、三十三首丈を抜萃致しました。それを旧交会の諸彦が読み下しのお出来になる様にと、出来るだけ平易に読み下しを記述して愚を呈しました。

この読み下し或は老博士の意に添わないことを陳謝致して置きます。

詩稿

三山生

第一詩

次鈴木兄韻

昭和二三、一二、二六日

世路崢嶸歲欲移
小堂猶幸免寒飢
自嗤鏡裏髮空白
女檢春衣婦潔柔

世路は崢嶸として歳は移らんと欲す。
小堂は猶ほ幸に寒飢を免らる。
自ら嗤う鏡裏の髪、空しく白きことを。
女は春衣を檢らべ婦は柔を潔くす。

案 神前に供える御供米のこと

星巖詩碑除幕式後泛舟遊鷺島海

昭和二三、六、二日

明時不用問桃源
携友來尋糸岬村
漫擬星翁詩酒興

明時用いず桃源を問うことを。
友を携え來つて尋ねる糸岬の村。
漫に擬す星翁の詩酒の興。

喜壽自賀 明年七十七也

昭和二三、一〇、三日

人生難會百年春
偶值喜齡慙愧頻
延壽工夫人若問
樂天知命不憂貧

人生會ひ難し百年の春。
偶、喜齡に値て慙愧すること頻なり。
延壽の工夫人若し問わば。
天を樂しみ命を知つて貧を憂えず。

三原城懷古

三原城は今を距る三百六十八年前、天正十年小早川隆景公の築造に係り、慶長二年公の六五歳にて薨去せる迄十五六年間の居城にして、後に桜山を負ひ、前は多島海に臨み、水陸の要衝を占め居然中国四国の諸侯を睥睨し、三原湾内の一巨觀たり、玉壺城と称し、俗に浮城と呼ぶ、公の左衛門佐又三原中納言と云ふ、豊太閤の信任尤も厚く、其籠を迎ふるために造榮せる所謂金の間は本丸御殿奥の二室にして、結構壯麗を極め国宝的存在なりしが惜むべし明治二十四年取毀され二十六年本丸中央を貫ひて山陽鉄道を布設し、現今残存するは天主台と海に突出せし東南隅の櫓台のみなり。昭和二十二年十二月七日 今上陛下我三原市に臨幸、右櫓台上の浮城寮に御駐輦、翌日帝国人絹、東洋纖維、三菱車輛の三工場を巡覽せ

させ給ふの光榮を荷へり。

今隆景公の当年を想ひ、余の幼時小学校教室として使用せるは其本殿及び金の間なりしを憶ふ時は誠に感憶無量のものあり。乃ち一詩を賦して、追懷の意を寓すと云ふ。

堅城臨海負桜山

制扼嚴然船馬関

粉堞画楼今何処

碧潮涵郭朝暮湾

豊公遺跡失金室

納言勲業断礎間

如今巨廠連屋起

居然已到工都班

聖皇昨辱幸

玉音加獎還

残墟日暮空相想

泉下英雄亦開顔

昭和二十四年一月

真田秀吉 謹識

金の間には太閤を迎えたこと二回なりと、天正十五年島津義久征伐の途次一度と外に一度ありと。

春宵歩月

昭和二四、四、二日

一刻千金春夜清

一刻千金の春夜は清し。

松雲篝火両風情

松雲と篝火と両つながら風情あり。

満珊踏月看花去

片々飛紅照面明

懷星巖詩碑同人

詩碑一就幾星霜

石帶青苔字尚芳

當事同人半黃土

梁翁陳迹放光長

偶感

絲瓜猶挂野人棚

秋老郊村風露清

明月東山撩句出

微吟乘興任筇行

芸窓所見

八十年來旧草蘆

三山四美靜幽居

俯看細雨春帆影

心与閑雲共澹如

聞雁

蓼紅芦滿汀白洲

誰向前湾掉片舟

離雁鳴過何処行

無端想起故園秋

満珊として月を踏んで花をみて去れば。

片々たる飛紅が面を照らして明らかなり

昭和二五、六、三日

詩碑一たび就つて幾星霜。

石は青苔を帯びて字は尚お芳し。

當事の同人は半ば黃土す。

梁翁の陳迹は光を放つこと長し。

昭和五、一〇、一日

絲瓜猶お野人の棚に挂る。

老いて郊村の風露は清し。

明月東山に句を撩りに出る、

微吟しながら興に乗じて杖に任せて行く

昭和二六、三、一日

八十年來の旧草蘆。

三山、四美、幽居靜かなり。

俯して看る細雨、春帆の影を。

心は閑雲と共に澹如たり。

蓼は紅にして芦は白く汀洲に満つ。

誰か前湾に向つて片舟に掉さす。

離雁は鳴いて何処の所をか過ぎる。

端しなくも想い起す故園の秋。

頼山陽先生二十祭恭賦

昭和二六、一一、二六日

赤心報国志何違

赤心、報国の志、何ぞ違わんや。

絶代文章忠孝輝

絶代の文章、忠孝を輝やかす。

三十万言担大筆

三十万言、担大の筆。

最欽斥廟盛皇威

最も欽ふ廟を斥けて皇威を盛んせることを

江上探秋

昭和二七、一〇、一〇日

白露金風秋氣清

白露、金風、秋風は清し。

一天無翳客衣輕

一天、翳なく客衣輕ろし、

扁舟載月澱江夕

扁舟、月を載る澱江の夕。

玉兔走波千里明

玉兔は波に走せて千里明かなり。

利根川治水記感

昭和二七、一二、一日

悠悠流去遠連天

悠悠として流れ去って遠く天に連らなる

一望金波揺万田

一望の金波、万田を揺がす。

暴雨破塘揺昔事

暴雨の塘を破りしは曠昔の事。

禹功余沢潤全川

禹功の余沢は全川を潤す、

癸巳元旦

昭和二八、一、一日

日昇東海旭光新

日は東海に昇って旭光は新なり。

独立迎來第一春

独立して迎え来る第一の春。

願与梅花冒冰雪

願わくは梅花と冰雪を冒すこと。

凜然振起旧精神

凜然として振起す旧精神。

瓢酒

とくくと垂り来る酒の鳴ひ

桶曙 寛

右漢賦詩

うれしき音をさするものかな

瀝々妙音瓢酒鴨

瀝々たる妙音は瓢酒の鴨るなり。

芬々芳氣入杯觥

芬々たる芳氣は杯觥に入る。

箇中何間清仍濁

箇中何ぞ問わむ清仍お濁なることを。

最足垂涎是此声

最も垂涎に足るは是れ此の声。

八十余年

昭和二九、二、八日

八十余年閣世難

八十余年、世難を闇みす。

残生欲傲聖良寬

残生傲むと欲す聖の良寬を。

南無一唱足吾分

南無を一唱すれば吾が分は足る。

撰取慈光心地安

慈光を撰取すれば心地は安し。

尾道遊覧

昭和二九、一一、一三日

伽藍堂塔各爭工

伽藍、塔飽各工を争う。

浄土千光一望中

浄土の千光は一望の中。

絶景江山看不飽

絶景の江山は看れども飽かず。

高楼呼酒倚清風

高楼の酒を呼んで清風に倚る。

三原ヤッサ踊

昭和三〇、七、八日

(天正初年隆景公築城の時に始まる阿波踊に似たり)

鼓絃絡繹九衢行

絃か鼓して絡繹として九衢を行く。

涼月蘭盆歌舞声

涼月、蘭盆、歌舞の声。

狂踊三原悦嗟踊

踊り狂う三原の悦嗟踊。

満棚侵露到深更

満棚として露を侵して深更に到る。

談風会

茶味詩情半日游

幽人追约会江楼

風流翰墨遠塵俗

一榻團欒和氣稠

江堤聽蟲

皓月一輪臨

啾々促識吟

秋声江畔路

羈客感懷深

五十里堰堤

巍然聳立堰堤雄

千丈霓橋架碧空

軫想邦家民福大

又思刻苦技人功

八幡八幡宮看桜

桜花爛漫一山明

觀賞幽人互送迎

聞道和公謫居処

仰思忠烈俯聽鶯

一高大木会

六十三年一夢中

昭和三〇、八、七日

茶味、詩情、半日の遊び。

幽人、追約して江楼に会す。

風流、翰墨、塵俗に遠ずかる。

一榻の団欒、和氣稠し。

昭和三〇、九、三、日

皓月、一輪に臨む。

啾々として識吟を促す。

秋声、江畔の路。

羈客は感懷深し。

九月廿九日竣工

巍然として聳え立つ堰堤は雄なり。

千丈の霓橋は碧空に架る。

軫想ふ邦家の民福の大なることを。

又た刻苦を思う技人の功。

昭和三二、二、二四日

桜花は爛漫として一山は明かなり。

觀賞する幽人は互に送す。

聞道く和公の謫居の処。

仰いで忠烈を思い俯して鶯を聴く。

昭和三二、九、二三日

六十三年一夢の中。

思哉寄宿向陵室

放歌鳴履駭行客

大義天真有校風

旧交会大会

新知旧友会寮房

爾汝相呼談笑長

某港某河艱苦跡

白頭今日感滄桑

・滄海＝滄海變じて桑田となることにて、時勢の甚だしき移り變りのことという。

八秋自賀

日夕優游未道貧

兒孫亦健值新春

吟花奔月送殘老

自喜八旬問適民

題自像

居常養拙護幽情

少小出鄉遊兩京

空剩多年治水迹

頽齡八十老書生

大阪旧交会

不同一醉五絳年

思う哉寄宿、向陵の室を。

放歌し履を鳴して行客を駭かす。

大義にして天真、校風有り。

昭和二三、六、二五日

新知と旧友が寮房に会した。

爾汝の相い呼んで談笑すること長し。

某港と某河と艱苦せし跡。

白頭の今日は滄桑を感じる。

昭和三四、二、五日

日夕、優游するも未だ貧を道す。

兒孫も亦た健やかにして新春に値う。

花に吟じ月を奔んで殘老を送る。

自ら八旬を喜んで適民を問う。

昭和三四、三、一二日

居は常に拙を養って幽情を護り。

少小にして郷を出でて兩京に遊び。

空しく剩す多年、治水の迹。

頽齡、八十、老書生。

昭和三四、三、一六日

一醉を同うせずして五たび年を経たり。

今日相逢是好縁

窓下瓶梅芳馥処

閑談交酌共陶然

三原談風会口占

別杯以後已三年

最喜諸賢皆健全

依例談風々人宅

品詩評画宛神仙

自郷歸途車窓

鑑陽三月驅輕車

沿道桃桜悉着花

舞子浜辺松似踊

淡州一沫隔烟霞

輓辰馬兄

夢耶非夢果真耶

倏忽登仙雲路賒

五十余年忘年友

牌前揮淚捧香華

偶成

資質本来蒲柳身

用心損養守其真

最欣無恙過中寿

今日相い逢う是れ好縁。

窓下の瓶梅が芳馥たるの処。

閑談し酌を交えて共に陶然たり。

昭和三四、三、一七日

杯を別つて以後已に三年。

最も喜ぶ諸賢の皆、健全なることを。

例に依つて談風す、風人の宅。

詩を品し画を評し、宛として神仙。

昭和三四、三、二九日

鑑陽の三月に輕車を驅る。

沿道 桃桜悉く花を着く。

舞子の浜辺の松は踊るに似たり。

淡州の一沫は烟霞を隔つ。

昭和三四、六、一九日

夢耶夢に非らず果して真なる耶。

倏忽として登仙して雲路賒かなり。

五十余年の忘年の友。

牌前に涙を揮つて香華を捧さく。

昭和三四、七、四日

資質は本来、蒲柳の身。

用心、損養して其真を守る。

最も欣ぶ恙がなくして中寿を過ぎること、

感謝天恩日々新

元旦家居

元旦家居無客来

暗香脈々は盆梅

寒威栗冽硯池凍

縮首炉辺閑把杯

第六百四十四首（老博士最後の詩）

庚子新年所懷

日昇東海曙光新

迎得今年米寿春

願与梅花護清節

生々百歲保其身

老博士の詩稿六百四十四首中、特に三十三詩を抜萃す。

老博士の詩稿六百四十四首中、特に三十三詩を抜萃す。

輓歌

悼三山詩翁 二首

浮城從自訂文縁

一去不歸春寂寞

相思己隔九重泉

東風控鶴跡飄然

詩博士兼二十博士

長向人間名姓伝

芸林才器学林賢

天恩に感謝して日々新たなり。

昭和三五、一、八日

元旦に家居すれば客の来るなし。

暗香の脈々たる是れ盆梅。

寒威は栗冽として硯池凍る。

首を縮むるの炉辺、閑かに杯を把る。

日は東海に昇つて曙光新たなり。

迎え得たり今年米寿の春。

願くは梅花と与に清節を護り。

生々百歲其身を保たむ。

生々百歲其身を保たむ。

生々百歲其身を保たむ。

生々百歲其身を保たむ。

生々百歲其身を保たむ。

生々百歲其身を保たむ。

生々百歲其身を保たむ。

生々百歲其身を保たむ。

生々百歲其身を保たむ。

生々百歲其身を保たむ。

生々百歲其身を保たむ。

生々百歲其身を保たむ。

生々百歲其身を保たむ。

生々百歲其身を保たむ。

太刀掛呂山

晩三山真田博士

學術^{ガク}功^{コウ}人^{ニヒト}所^ヲ推^{オシ} 詩才^{シサイ} 壽德^{ジュトク} 社中^{シャチュウ} 魁^{カウ}
迎春^{イシュン} 未^レ獻^{ケン} 米年^{ミネン} 賀^ガ 新紙^{シンシ} 一隅^{イツコク} 伝^{ヘテ}計^{ケイ} 来^ル

芸薇^{ゲイ} 幾^レ共^ニ 酒詩^{シュシ} 筵^シ 東去^{トウキョ} 終^ニ 無^シ 再會^{サイカイ} 緣^縁
長歎^{チヤウタツ} 王壺^{ワウ} 吟社^{インシャ} 老^{ラウ} 如今^{コンキョウ} 殆化^{タイカ} 北邙^{ヘイマウ} 煙^{エン}

徽徽^{ヒヒ} 備校^{ヒョウガウ} 王壺吟社^{ワウインシャ} 三原の詩會の名。

悼真田三山翁

詞方^{シホウ} 卓犖^{タクダク} 拔^{ハキ} 時流^{ジリウ} 詩酒^{シシュ} 悠々^{ユウユウ} 物外^{ブツガイ} 游^{ユウ} 秀野^{シュウヤ} 甘泉^{カンセン}
悠忽^{ユウコツ} 逝焉^{シヤ} 捐^{セン} 縮去^{シュクキョ} 茫々^{マウマウ} 八十八^{ハチジュウハチ} 春秋^{シュンシュ} 木下^{キノジメ} 弥^ミ 一^{イチ}

偶感^{オウカン} 昨見^{サカシ} 朱顔^{シュガウ} 談笑^{タンシャウ} 人^{ニヒト} 可^シ 悲^{シム} 骸骨^{ガイコツ} 不^レ復^{フツ} 晨^{チン} 寔^シ 是^シ 浮生^{フシウ} 朝露^{チャウロ} 身^ミ 川口益吉郎

君や逝くつゝいて我も彼の国に

娑婆八十幾を俱にかたらん

偶占

栖鶴・三山合作

八十余年^{ハチジュニシヨネン} 閑^{カン} 世難^{セナン} 残生^{ザンシウ} 欲^ス 傲^{ハント} 聖良^{セイラウ} 寛^{カン}
南無^{ナム} 三唱^{サンシャウ} 足^{タラ} 吾事^{ガジ} 常浴^{ジョウヨク} 毫光^{ホウカウ} 一枕^{イツシヤン} 安^{アン}

悼真田三山先生

一片^{イチペン} 幽情^{ユウセイ} 曾^{ソノ} 結^{ムス} 縁^縁 夢乎^{ムコト} 是^レ 幻^{カク} 忽^ニ 登^{ノボ} 仙^{セン}
高山^{コウサン} 流水^{ルイシュイ} 無^シ 由^ユ 聴^キ 海内^{カイネン} 知音^{イシン} 応^{オウ} 絶^{ツク} 絃^{ゲン}

真田博士の文献への功績を讃える

西村南岳

年々歳々花相似たりで、上野の桜が咲きそめた。歳々年々人同じからずだ。

アノ温厚で何人からも敬尊された、真田老博士は、この四月十日の鎌倉長寿寺での清名会（二百七十回）のお花見雅筵には御出席ならなくなって終った。

年々歳々花相似たるも、人同じからざるの感を深うする。謙遵で、純情で何時も微笑をたたえて居られるが、一種の古武士の様な凛々とした威厳が底光りして居った。それでも古書画の鑑賞となると老博士が年を忘れて青年の様な若かかしい気持を持ちつづけて漢詩の解説をして居られた。アノ真率な態度の老博士のお姿が今尚、目前にチラツクどうして八十八歳という高寿とは受け取られなかった程、学究的態度でもあった。

此の追悼号の劈頭に老博士の写真が出て居ります。天真と云うか無邪気と云うか、ニコやかな微笑を帯びた、ものやさ

しい慈顔そのもので、「ヤア今日は……」と、清名会へ出席
になったの御挨拶ぶりが、アノ写真の通りの慈顔であった。

このニコやかさは、何時も何時も変わることはなかった。

老博士の人間としての完成された人格の円満さが冒頭の写真
に丸出しにされて居る。

その写真の上に

居常守レ拙養ニ幽情。

居は常に拙を守って幽情を養う。

少小去 郷遊ニ兩京。

少小にして郷を去って兩京に遊ぶ

空 剩多年治水迹。

空しく剩ます多年治水の迹。

顔齡 今日 老書生。

顔齡今日、老書生。

昭和三十五年 三山米寿 三山は真田老博士の雅号。

米寿 八十八歳

〔詩の大意〕自分は世に処するに、本分を守って、雅懷を養
て居る。年少にして故郷（三原）を出でて、京都や東京に
遊學をした。淀川や利根川の河川治水の大功績を世に残して
八十八歳の老齡だが、頼三樹詩集を集編する老書生である。

「守拙」に「つたなき」を守りて、自己の分に安ずるという謙遜
した言葉なり。

この詩は老博士の謙遜そのまゝの詩で、この詩こそ老博士
の一生涯を赤裸々に吐露された名詩でもあると感じた。アレ
程の治水の大功績があつたのに、少しの誇りというものを持
たれなかつた。

謙讓な態度で一生を終らせられた、この心境は私共が龜鑑
として学ぶ可きではありますまいか。この詩を読んで此の感
を一層深うしたのでした。

三月の初めの日曜日の真田邸で令嗣の弘氏と旧交会の武田
信義さん、共榮印刷の岩屋さんとで頼三樹詩集の刊行に就て
の相談をした。

頼三樹詩集の漢文字で、現代の印刷活字にないのがなんと
百十字程の多数があつて、それを一字ずつ木印に彫らせるので
それが為めに四十日はかゝるということであつた。

現代この様な苦心と犠牲とを取えてしながら頼三樹詩集の
刊行が実現されたのは偏に老博士の遺徳であると深く深謝い
たします。

その時、弘氏は、『おやじの古書画ノートの中に、南岳曰
く、此幅は可…… 南岳曰く、此幅は不可……と、西村さん
のことばかりが書きこんである』と申された。

考博士は野人輩が『此幅は真蹟だと思ひます』といった時
には曰く可しとし、『此幅は贋作ですよ』と申し上げた時には
「不可」と明記されたことを知って恐縮した。野人のよう
なもの云つたことを、聴きずてになさらないで一幅、一幅
ずつ、曰く可、曰く不可、とノートに明記された様な会員は
曾て一人もない。老博士が古書画鑑定という風雅なことに對
しても、学究的態度を保持された事を物語つて居るではあり

ませんか。

このことを弘氏から承って、老博士が何事に対しても真剣な心構えであつたのに心打たれたのでした。

弘氏が「この押入れにある幅は父が遺愛の幅ですが、私としては全部このまま保存もし、又親戚へも片身分けをしたいと思つて居りますが、この幅の中で、どれとどれとを大事に保管すればよいか教えて頂けませんか」という事であつたので、頼三樹詩集の巻頭にある三樹の幅と共に頼山陽の幅二点とも選んで、別に布呂敷に包んで大事に保存される様に申し上げた。

その山陽の二幅とも、老博士が自身の命の様に大事に、大事に愛蔵もし、常に御自慢の種でもあつた。それは『修史偶題』七絶と、『修史自述』七絶との二幅で、特に『修史偶題』は、老博士が初めて手に入れた山陽の名幅で、然もそれを譲り受けられた時に逸話のあつた幅ですから『修史偶題』に就て読解とその逸話を申し上げて見ましよう。

山陽修史偶題七絶

野史亭前 無数山。 野史亭前無数の山。

某岡某阜 事相関。 某岡某阜事相関す。

推し窓抛華時為し酔。 窓を推し華を抛つて時に酔を為せば

歴々興亡 落照間。 歴々たり興亡落照の間。

敬叔与余同此醉者故書 敬叔は余と此の酔を同うする者、故に書

与之

も之を与ふ。

三十六峰外史

三十六峰外史

この山陽の幅の大意は、

野史亭（山陽先生のお住いは京都三本木の水西荘でありましたので、その水西荘のことを野史亭とも申された）の前方に東山から比叡山をも眺めた一望の景色は、無数の山々が起伏して見えて居る。某の岡もあれば、某の阜もある。それらが悉く自分の日本外史の記事と関係が深いもののみである。窓を推し開けて筆を抛げうって、酒杯を傾けつつ前方の山々を眺めると、古今の榮枯盛衰や興亡のことどもがアリアリと夕栄け空の彼方に見えておる様だ。

此幅の箱書に、老博士の入手のことが記されて居る。

『祖父良莖字は敬叔、号を醉茗という。長州藩の典医なり、弱冠にして京都に赴き医を小西元瑞に学ぶ、屢々山陽の門に出入して先生に書を乞うた。先考（父）九峯も亦た深く此幅を愛し珍襲すること年久しかった。友人真田君（老博士）偶々観て嘆賞して措かず、懇望に依つて之を割愛す。

時に昭和十四年九月也

高島京江誌

と箱に謹書してある。此の山陽の幅は老博士の友人高島京江氏の祖父（敬叔）が山陽先生に親しく御願ひして揮毫して戴かれたという米歴のある高島家一番の家宝であつた事を知る。此の時老博士は六十七歳であつた。

此の山陽の名幅を老博士が手に入れられたのに就て、清名会の会友南一氏が、その当時の模様を次の様に物語られた。

「真田氏と高島家主人とは旧知の間柄であつたので、真田氏が案内すれば高島家伝来の山陽名幅が拝観が出来るからとの事で、山陽好きの五六名が打ち揃つて、高島家の上つて、来歴づきの山陽を数幅拝見した。何れも名品で一同感服したがその内、山陽の双幅が特に気に入つたので、小生から真田氏にお願ひして先日拝見した中で双幅を何んとか譲り受けが願ひたいとお頼みした。

高島家では山陽の双幅は、祖父が京都遊学の時、山陽先生に親しくお頼みして揮毫して頂いた門外不出のもので、表装する時も、経師屋を自宅に呼んで表装をさせたという来歴づきであつたが、真田氏の御尽力が功を奏して、双幅を真田氏と小生とが譲り受けることになった。そこで真田氏にこの双幅を分けるのは、クジ引きで分け様ではありませんかと申し出たが、真田氏は強引に、『修史偶題』の幅を取って終われたので、私は『鴨河即事』の幅を引き受ける様になった次第だ」

と、自分の『鴨河即事』の幅よりも、老博士の幅の方が遙かに名出来だと、如何にも残念相であつた。

この様にして山陽の名幅を譲り受けられてから、段々と山陽熱が向上された。

今一幅の方の山陽『修史自述』も仲々の名出来だ。この幅は老博士が郷里三原に疎開中に入手されたのだと思う。

蠶冊 粉披 煙海深。

蠶冊（紙魚の食つた書物）粉披（ふんば）海は深し。（煙英の煙が部屋中をこめて

援毫欲下 復沈吟。

毫（筆）を援つて下さんと欲して復た沈吟す。

愛憎 恐狂 英雄跡。

愛憎（あいそう）恐らくは英雄の跡を狂げん。

独有青燈 知此心。

独り青燈の此心を知る有り。

修史自述録似豊田老人

修史自述を録して豊田老人に似す。

山陽外史頼襄

山陽外史頼襄

この老士遺愛の山陽の二幅とも、山陽先生の四十八歳の有名な詩で、その書の出来栄えも二幅とも名作で、老博士が御自慢であつたのも無理はない、

これ程の名山陽は仲々容易に手に入るものではなく、これは老博士の山陽についての鑑識の高かつたことを雄弁に物語つたものだ。

この外に梁川星巖の名幅二点がある。このその星巖の幅に就いては後に精しく説明致しよう。

老博士と山陽会

東京の『山陽会』というのは、昭和五年頃であつたか。徳富蘇峰先生の指導で木崎尚氏がその主幹で山陽研究と遺墨

の觀賞や出版が目的で発足した。木崎氏は『山陽と竹田』という小冊子を刊行されたのでした。

昭和九年十二月（老博士六十四歳）にこの山陽会の納会を清名会の代田幹事が肝煎りで丸ノ内帝國鉄道協會を会場として盛大に催された。その時の出席者は東京に於ける山陽の好事家連で、その一斑を記すれば、

木崎好尚。奥田草山。和合英太郎。植木廉。牧彦七。代田冬蛙。佐野彪太。木内淇堂。南一。高橋信。頼成一（山陽の曾孫）。などの諸氏であつた。

代田幹事は此の時、鉄道協會に來合せられた老博士と偶然に出逢れたので、

「真田さんも山陽会に出席なさいよ」といって老博士をその納め会へお連れされたということであつた。

これは老博士の六十四歳の十二月の事で、それが縁となつて山陽会に顔を合される様になつた。

山陽の幅にも心引かれる様になられて、「修史偶題」の名幅を高島家から割愛を受けられたのも、それから三年後のことであつた。

牧彦七博士は山陽会では老博士よりも遙かに先輩な地歩に居られたが、老博士の様な正確で着実な山陽の研究という事はなされないで亡くなられた。山陽の研究では初め頼博士の後塵を拝された老博士がその後ズンズン進歩して、その晩年

は頼博士などを遙かに凌駕した山陽通になられたのでした。

これも老博士が老いを忘れて孜々と努力された研究の成果でありましよう。

老博士と古書画鑑賞の動機

老博士の郷里三原は頼家の発祥の地、竹原とは極く近いので、三原も頼家発祥の地といつてよい位で、此の地方は山陽を中心とした頼家一門の書幅の鑑賞が盛んであつたので、老博士もその雰囲気になされたのがこうして、自然と山陽好きになられたのでありましよう。

よく世間では書画骨董いじりなどと申されますが、老博士は骨董いじりではない。頼家の書の愛好者であり。研究家であり、礼讀者であつた。それが普通の愛好者の域を超脱して頼三樹詩集の輯纂という処まで押し進まれたのであります。老博士は禹功隋績の功成つて六十二歳で退官され、その翌年に現在の山王のお邸の結構が成つた、その六十三歳頃から古書画鑑賞の道に心深められる様になつたらしい。」

これは私が推定であつた。処が後に旧交会報第二号の『隨筆』に老博士は自身の『漢詩』という題目を一読すると果してその通りであつた。

「元來大の木強漢である僕が、昭和十年六十三歳頃より書画を弄するに至つたのは不思議な次第である。数年後拙宅にて書画鑑賞の清名会を開催し、名井先輩を招いた時、氏

「曰く真田が書画をやるのかい」とさきも大棒事を発見したようなヒヤカン振りを記憶す。真に不思議の至りである。初め親友牧彦七兄の誘導にてある会に出席したことに起源がある。

その後次第に熱心になり、研究もし、先進を凌ぐの勢で深入りして、所謂烟霞癖を成した訳である」

と老博士の自叙があるからして、書画鑑賞をば六十三歳頃から手を染められた事が確である。

代田幹事はその頃の老博士の書画鑑賞への入門振りについて、

「真田さんはその頃は牛込の真蹟会村山駒之助翁の宅に度々お出でになった。書画の鑑賞は初歩だからこれから大いに勉強するのだと申しておられた。

何んでも真田さんの奥さんが儒者の娘さんで漢学の素養があったから頼家の詩書を研究するには便利だなどと笑いながら申された」

とのお話も承った。

京橋数寄屋橋畔に共楽クラブという古書画骨董を出陳し、それに最低評価を記入して、来観者は勝手に、各自希望の品に、希望の価格を書き入れて購入が出来るという、極めて便利なクラブがあった。

このクラブの支配人が山口県出身の田村照人氏で、老博士

もこの共楽クラブで田村氏と入懇になられた様だ。

その当時は老博士が古書画の鑑賞の道に三昧し没頭されるには好都合の時でもあった。

前記の山陽会が後日、山竹会と改称されて、山陽と竹田を主として鑑賞し研究する様になった、その世話役を楨博士がなされたので、老博士はこの山竹会でミッシリと山陽の書を研究された様だ。

一方、村山翁の真蹟会が早稲田の大隈会館に催されて居る、又他面、数寄屋橋の共楽クラブで田村氏の指導も受けられた。

処が老博士の古書趣味を最も誘導したのは、真田邸の山王の坂をダラダラと下って右折した一丁程先きに藤田医院の「清名会」があった。

この清名会が老博士の古書趣味への一大温床となったのであります。

△―老博士と清名会

昭和四年四月に大田区新井宿二丁目藤田医院で院主藤田謹也翁と栗田亀次郎氏、田村照人氏の三人で古書画鑑賞の「清名会」が発足した。

それは丁度清名の佳節であったので、清明会と名づけられたが、その清明よりは「心の清廉なるきこゑ」という意義がよびならして清名会と改称された。

私はこの清名会第二回目から参加したので初めはこの四人程で相会いして居った。

それが段々会友が増えて現在では秋田、郡山、白河、宇都宮、熊谷、深谷、勿論東京に大多數の会友があつて回を重ねること二百七十回にも及んだ。

この藤田医院は戦災で趾かたもなく消失して終つたが、仲か仲か豪華な建築であつたし、その庭園は幽邃閑雅でもあつた。何にしろ八十株ほどの老木が門前から庭内に植え込まれて、柿樹の下で滾々と清水が湧いて、それが池に流れ込む様になつて居った。池中の鯉魚が躍ねる夏になると蛙声が耳を聳する程であつた。

その高殿の様な二階で、この庭園を俯瞰しながら古書画の鑑賞をやつた、先ず塵外の趣があつた。

盟主の藤田翁は墨竹が好きであつたので昭和十五年には上野公園梅川亭で墨竹会を開かれた。

昭和十七年には東京美術クラブで、文晁会を開催された程の文晁の愛好家でもあり、蒐集家でもあつた。

老博士は昭和十四年頃（六十六歳頃）であつたが共楽クラブの田村照人氏に連れられて、藤田邸の清名会に参加せられたかの様に記憶するが、これがどうもハッキリとした記憶ではありません。

この様に老博士は六十六、七歳という老境に入会されたの

であります、アノ研究心の強い、頭脳の明哲なお方でしたからして、清名会の先輩連をズンズンのり越えて、極晩年には山陽や三樹の幅を私共に読んで講義をなさる程な超人的な進歩を示されました。

△―清名会は百回記念展を昭和十八年十二月に築地八百善酒楼で盛大に挙行了した。その時出陳された南画の華山や文晁、高陽山人などの名蹟の大部分が戦災の為に烏有に帰して終つた。

もうその頃には山陽会の山竹会も木崎高尚氏の逝去で自然と消滅し、村山氏の真蹟も亦復然り、共楽クラブも不振となつて、唯々清名会のみが空襲下でも古書画を掛けての欣賞振りを發揮して居つたが。

十九年、廿年とあつては、東京空襲が段々激烈となつて来たので、清名会の会友もそれぞれ故郷や、各縁故地へと疎開されたので、清名会の開催も中絶せざるを得なかつた。老博士も二十年の東京大空襲の爲め、四月に奥さんのお里岡山線金光町に老夫妻が疎開され。

△―老博士郷里三原に於ける文化生活

老博士七十四歳（昭和二十一年）の五月、郷里三原の生家へ疎開されましてから、郷土に於いての文化生活が初つた私は老博士の三原に於かれての文化生活に就いては余り識る処がありませんが東京の清名会を想起されて、三原の同好の士

を集めて「談風会」を組織されたと承りました。

三原の談願会は古書画を評する清名会に更に一步を進めて、老博士自身が漢詩に熱中されて居たので、漢詩を品する会ともなされたのであった。

この古書画を鑑賞し、漢詩を品評するの談風会は今日も尚三原に於いて継続されて居ると聞いて居ります。老博士の遺徳の昭々を偲ぶのではありませんか。

三原に於ける老博士の文化生活中で特記すべきは談風会を企てられたのと、三原へ疎開せらるるや漢詩を作ることを独学で初められたというこの二つでありましょう。七十四歳という老体でありながら平仄と韻による面倒な漢詩を孜孜として勉められた事にはその精根の強いのに驚き入る外はありません。

その作詩は独学から更に前進されまして、七十六歳（二十三年）の八月からは虎南吟社に入門されて、圭齋、呂山両先生の批正を受けられた。それに満足せらるることなく、その上尚のこと、七十七歳（二十四年）三月から黒潮吟社（和歌山県鮎川局区内）にも入門して高橋藍川先生の批正を請われたのであります。

兎に角、七十七歳という高齢者にして、アノ六カ敷い漢詩を作ることに熱中されて、それを孜孜として懸命に努力されたという老博士の精魂の強さと勤勉には敬服して頭が地に下

るものがあります。

此の作詩のことに就いては後章に精しく申し述べたいと存じます。

△―雙鷺洲の星巖詩碇の建立と老博士

三原の糸崎岬から大鷺小鷺の二島を望んだ景勝は絵も及ばない、瀬戸内海中の冠絶だと言、よく老博士は私共に自慢して居られた。

往時、梁川星巖が壮年の折、三原に逗留して、舟を大鷺小鷺の雙鷺洲に泛べ、感興極まって詠嘆したのが、星巖の一代の名詩で古今の絶唱とまで呼ばれた「雙鷺洲の詩」である。

疎開して郷土に閑居中の老博士が郷土の為にと糸崎療病院長高亀氏におすすめになって、糸崎八幡社前、双鷺洲を眼前に眺望する勝概を下して、星巖碑を建設せしめられた。

かくて老博士の肝煎りで雙鷺洲の詩碑の設立を見るに到ったのであります。この建碑は、昭和二十三年（老博士七十六歳）の六月二日のことであつた。

老博士は当時のことを、

星巖の詩碑の除幕式の後で舟を泛べて、鷺島海に遊ぶ
明時不^{チロコト}用^{ベテ}問^{アリ}桃源^ノ。携^レ友来^ヲ尋^リ糸岬^ノ村。漫擬^ニ星翁^ノ詩酒興悠
々^ニ泛^レ海^ニ到^ル黄昏^ニ。

糸崎の碑の辺に立ちて眺むれば

細雨春帆双鷺灣かな

糸崎の松より沖を眺むれば

船や船々絵巻かと思ふ

老博士が雅友と共に舟を泛べての詩酒の興は星巖の情懷と同じものがあつたと思います。

糸崎岬への建碑の何年かの後日物語であります、この建碑以上の一大歓悦事を招来されました。それは此の雙鷺洲の詩を書いた名幅を手に入れられたからであります。

老博士はこの星巖の名詩の幅を入手して鬼の首でも取つた様に欣舞快哉を叫ばれたのは無理はない、星巖が三原逗留中雙鷺洲の名詩と共に天下に名高い「常盤雪行」の名幅もコロコロと転んで老博士の懐中にころがり込んだからであります。

この星巖の古今の絶唱と呼ばれて、人口に膾炙しよ絶唱の二名幅が老博士の庫中の有に帰したからして老博士の満悦歡喜それこそ言語に絶するものがあつた。

這般の好消息は書画愛好癖のお方でないとは想像も及ぶまいと思ひます。

さて、茲処で少々冗長にはなるが、老博士の御冥福を祈る一助として、星巖、古今の絶唱雙鷺洲と常盤雪行の二名詩を掲げて見ることに致しましょう。

梁川星巖

遊三糸崎二海上有二大小鷺洲二詩酒還成半日遊。此生隨處有送悠々。他年夢裡問二陳迹。細雨春帆雙鷺洲。糸崎に遊ぶ海

上に大小鷺洲有り。詩酒還た成す半日の遊び。此生隨處に悠々を送る。他年夢裡に陳迹を問わば。細雨春帆雙鷺洲。

これを誦誦すれば好風眼前に在り、星巖に陪し、老博士と共に酒杯をとつて小舟を雙鷺洲の間に泛べるの想いがする。

常盤雪行

雪庄二笠檐二風捲レ袂。雪は笠檐を^{ひた}し風は袂を捲く。呱呱^{ぐわ}覓^み乳^に若^{わか}為^な情。

他年鉄拐峰頭險。他年鉄拐峰頭の險。

叱^{しか}咤^た三軍^{さんぐん}是^こ此^こ聲。三軍を叱咤するは是れ此の聲。

老博士の遺愛幅中に、前述の山陽の二名幅と、星巖の二名幅とがあることは、その鑑識に通じて居られたこと、識見の高かつたことを物語つて居ります。成金連が黄金の力を以て徒らに蒐集するのと趣を異にして、老博士の人徳が自然と名幅を招来したものであつた事を特に銘記するものであります。

△一老博士山王邸の三樹百年祭

老博士は懐かしの故郷を、思ひ出多き談風会の諸彦を、展望懷古尽くことなき雙鷺洲を、後にして鉄路一笛、東都山王台の人となられたが八十有三歳（昭和三十年）の歳暮であつたのであります。

私共清年会友一同は十年振りに慈顔にあふるる老博士の微

笑を迎えて欣悦歎喜の情のつくる処がありませんでした。

昭和三十四年の十月は頼三樹が安政六年十月七日千住の小塚原で所刑されて、国難に殉じてから百年忌になるというので、老博士は自分の宅で三樹の百年祭の心持ちで三樹の幅を観賞する清名会を催したいからよろしく頼むとの御依頼があったので、九月二十九日に山王の真田邸で清名会を開きました。

真田邸のお二階が会場にあてられて、清名会の会友もそれぞれ御自慢の三樹の幅を抱え込んで出陳したが、保原幹事は大の三樹の愛好者で北海道書きの壮年時代のものから晩年の遺墨など二十帖も愛蔵して居られる。その中での逸品を持参せられた。

勿論、老博士の御自慢の三樹の幅から、例の山陽の二名幅星嶽の二名幅なども掛けて、老博士はいと満足げに、三樹の詩を欣誦しつつ、三樹の生涯をも物語られた。

会友一同は三樹の芳蹟を拝し、精忠義胆の遺烈を敬仰して、今更に感慨の深いものがあつた。

軽い御饗応まで戴いて、山王台に秋の夕霽が立ちこめる黄昏に真田邸を辞した。

この一日は老博士の御生涯中でも最も適意の日であつたのでありましよう。

△―老博士最後、熱血の結晶、頼三樹詩集の集録

頼三樹国難に殉じてから星霜茲処に二百年、三樹を思うの至情が世難と共に薄すらぎつつあるを老博士は心秘かに浩歎して居られた。想い出すと老博士が東京に帰還せられてから間もない頃であつた。

西村さん君の手許に三樹の詩の記録したものがあつたら知らせて呉れ給へ三原の方で三樹の詩集を刊行するといつて居るからそれに送ってやるのだと申されたので、私が永年の間に書きためた三樹の詩を老博士のお手許へ差し上げました。

何時の日にか三原の方で三樹詩集が刊行さたるものだと、心待ちその詩集の出来るのを待ちして居りました。

すると私が昨年十一月二十九日高隆古百年忌法食と墓前祭を谷中天竜院で挙行致しました時に、

老博士が『此の度び頼三樹の詩集を刊行することになった多分百五十円位で皆さんにもお分ち出来ると思います。御希望の方は申し込んで下さい』と、申されたので、ハット思つた、老博士が御自分で刊行なさるなんて、以前三原市の有志が刊行するのだと、いうことを耳にして居つたので、心中大いに驚きました。

老博士が八十七歳の御高齢で、三樹詩集を刊行なさるなんて、深い事情があるのではあるまいか、何か知らぬ暗いものを私が感じました。

三原の方で刊行するのを中止したのでしょうか、その間の

事情は聞く由もないし、承る必要はありません、唯々現代の何人も刊行し得ないと思われる三樹詩集の刊行という一難事を老博士がアノ御高齢で敢行されたのは、敬嘆敬服の念に堪えません。

一体三樹の詩集は何故集録されねばならなかったか。何故に刊行が重視され、必要としたかに就て一言述べさせて頂きます。

三樹は御存知の如く山陽の東三子に生れたが、父山陽の精神を實行したのはこの三樹丈であつた。

三樹があつて父「山陽精神」を重且つ大をなしたのであります。

三樹が二十二歳から三十五歳までの行動と心機はその詩に表現されて居ります、と同時に三樹が如実に山陽精神を實行したるかを現実示して居りますからして、三樹の詩集は三樹の自叙伝でもあり、その心機を探る唯一の鍵なのでもあり、引いては山陽精神の実体でもありますからして、家兄事庵や支峰の詩集とは日を同うして論ずべきものではありません。

頼家では山陽の父春水の詩集有り、杏坪の詩集有り、勿論山陽の詩集在り、支峰の詩集あり、然るに三樹の詩集のみは至難事であるからして頼潔氏も手を染めるに由なかつた、流石の木崎好尚氏も手を着け得ないで終わられた。

三樹詩集の集録の難儀なのは、その詩稿の手控が三樹の死後五年、蛤御門の変の時に烏有に帰して終つたので、一々三樹の遺墨の幅によつて集録するより外に途はない。選墨を見るところがなかなか至難な事で一朝一夕で出来る事ではない、永い永い年月を経て初めて出来るのであるからして、意外の長年月がかかつて居る。

集録が難儀であるのに、刊行は尚更に至難だ。刊行しても利潤があれば出版業者は欣然として出版して呉れるが、売れ行きのかんばしくない刊行物には出版業者は手をつけない。

老博士は初めから自腹を切る覚悟でこの詩集の刊行を企劃せられたのです。この老博士の心機の高潔サには、何人も頭が下るではありませんか。

「△△がアノ人により移つたのだよ」と私共の幼い頃、古老がよくこの様なことを口にするのを耳にしたことがありました、老博士が三樹の遺墨を鑑賞し、欣仰して居られる中に段々と三樹の心が老博士に乗り移つたのではないでしょう。三樹の血が老博士の心の中に流れ込んだのでしょうか。アノ高齢をものともなさらないでセッセとペンを走らせながら「努力が入って、金は損する事は、自分がやらなければ誰も、この様な仕事をする人はない、然も今、自分が刊行しなければ後世何人も刊行はしないであろう、前難を拜しても自分がやって終おう」と、自らの心を励まされたのでしょう。

こう思いながら老博士の原稿を見ると、それこそ老博士の晩年に於ける血粒です熱血そのものです。

ジツ見ると睫が熱くなるのを禁じ得ません。

尊い原稿である。

尊い人であった。清名会の会友としてアノ様な優れたお方と肩を交え得た事は何んという幸福であつたでしょう。

永年の間、三樹の詩集の刊行を熱望して居った私が、老博士の突然の御逝去で（老博士はお亡くなりになる日の夕方その日の日記を認めて、その夜半静かに永遠の眠りにつかれた）印刷中の詩集への校正のお手伝いをさせて頂くなんて勿体ないと、感激やら感銘で胸が一杯です。

△―老博士は清名会では、誰からも敬尊され、敬愛された人であつた。山妻はこう申して居ります「真田さんは清名会にお出になるのが、ほんとに楽しみの様でした。毎会毎会ニコニコしながら、ヤア今日はと、無邪気な子供のやうに喜で出席を致されました」と、

老博士晩年の楽しみは、山陽や三樹の幅を見る事が何よりものの喜びであつたのでしょう。

芭蕉翁が「風雅に古人の心を探る」と、謂われた様に老博士は、山陽の書に接しては、山陽の心となり、三樹の書を観ては三樹の心になりきられた様でした。

斯くて七十六歳から漢詩の道を学ばれたのは後日、三樹詩

集の集録への非常な手助けとなつたことは申すまでもありません。

禹功隋續の偉勲を立てられた、工学博士で勲二等の老博士が米寿の高齢でありながら、何人も敢て企て得なかつて、三樹詩集の集録と刊行を致されまして茲に、三樹不朽の「紙の碑の金字塔」が建立されたのであります。

これは老博士の禹功隋續の偉勲と俱に、宣揚せらる可き不滅の文化偉勲であつたと御祝福申し上げる次第であります。

この旧交会の「老博追悼号」と共に「頼三樹詩集」を、老博士の墓前にお供えしてお冥福をお祈りする日の近からむ事をお念じ申し上げます。

合掌

（昭和卅五稔四月十一日、鎌倉長寿寺にて清名会お花見雅筵の後一日）

編輯後記

青 木 楠 男

さきに谷口さんがなくなられ、昨年は辰馬さん、金森さんと御逝去がつづき、その涙もかわかぬ間に又真田さんの御他界で、建設技術界が引きつゞいて河川の大家を失つてゆくことは悲しんでも悲しみきれない次第である。

旧交会報がたび重なつて追悼号を出さねばならないはめになつた事を心から残念に思ふ。

筆者は大正十年にそれまでやつて来た河川の勉強をふりすて、四号国道栗橋架橋工事に身心を打ちこまねばならなくなつた時、現場のことを何にも知らない私に安心して仕事の出来る様にして下さつたのは真田さんであつた。

架橋事務所には当時利根川改修工事事務所からのよりぬきの現場員が集められておつた、石森、和田、西田、斉藤さんといづれも一騎当千の人達であり、定工夫も岡安、根本、長谷川君などとベテラン揃いであつた。これは皆真田さんのゆきとどいた御心遣いの結果であつたと思ふ。

大正十三年に無事に工事を完成することが出来、それ以来今日まで自分が橋梁家と思つていたゞける様な位置におゐることの出来るのはすべてがこの時のスタートにかゝつてをると

思ふと、真田さんの溫情に御礼の申し上げ様もない気持ちでいっぱいである。

其後かけ違つて仕事の上で御指導をうける機会をもたなかつたが、三原から御上京になり旧交会其他の席上で又其溫客に接することが出来る様になり、技術方面のこのみならず漢詩、書画などについての御蘊蓄を伺へる様になつた事を心から喜んでおつたのだが、今幽明境をことにするに至つた事は、返す返すも残念な事である。

真田さんは実に記憶のよい、しかも筆まめな方であつた。訃報に接して大森の御宅へ伺つた時、御自筆の真田秀吉年報を拝見し、其克明さに頭が下がつた巻頭にかゝげたものがこれである。我々もこうしておかなくてはと教へられるところ大である。

旧交会報の編輯係では先生の御逝去と共に追悼号発刊の計画をたてたのであるが、これと平行して、御遺族と御旧知との間で先生の遺稿である「賴三樹詩集」の出版が企画されたこんな関係から係は御遺族並に西村南岳さん外先生の旧知と御目にかゝる機会が出来、この追悼号には旧交会報の前例にはないが、会員以外の方々からの追悼文も登載し様と云ふ事に決つた。又先生が残された六百五十首に近い詩の中から西村さんに三十数首を選んで頂き、しかも我々にも読める様にして登載することにしたこれらの点はこの追悼号の特異な点

と云へ様。

「賴三樹詩集」は御遺族の好意により、この追悼号と一緒に會員一同へ御届けすることが出来る筈である。こゝに御遺族に対して厚く御礼申しあげる次第である。この詩集の編纂は先生の晩年の大きな御仕事であつた。残された沢山の詩と共に先生の土木専門以外の面での御活躍を示すものであつて、深い敬意をはらわないではいられない。

追悼号の編輯にあたつて會員諸賢並に三原市の方々から、沢山の原稿を頂き立派な追悼号をまとめる事が出来たこゝに各位の御好意に対して厚く御礼を申し述べる次第である。

更に「賴三樹詩集」の発刊並に会誌にのせた先生の作詩の選択に御尽力下さつた西村南岳氏其他の方々には深い謝意を表すものである。

今編輯後記を書きおえた私の頭の中には、あの老鶴の様に清楚な真田先生の風ぼうが浮んで来る。こゝに謹んで先生の御冥福を御祈してやまない。

(三五、八、二一)

非 売 品

昭和三十五年八月三十日印刷

発行所 東京都港区芝海岸通一ノ二五

建設省関東地方建設局庶務課内

旧 交 会

印刷所 東京都台東区北稻荷町六六番地

合資会社 共 栄 社

電話 四二五〇一番